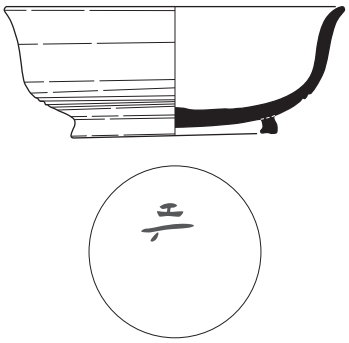
平城京左京四条四坊九坪（HJG13次）

－令和２年度発掘調査報告書－



2021

公益財団法人　元興寺文化財研究所

平城京左京四条四坊九坪（HJG13次）

－令和２年度発掘調査報告書－

2021

公益財団法人　元興寺文化財研究所

序

このたび、令和２年に調査を行いました平城京左京四条四坊九坪の発掘調査報告書が完成いたしました。古代都市平城京は和銅３年（710）に遷都し、恭仁京や難波京への一時的な遷都もありましたが、延暦３年（784）の長岡京遷都に至るまで、日本の中心でありました。今回の調査は平城京の北東部にあたる地点で行われました。

発掘調査では奈良時代を中心とした遺構がみつかりました。特に奈良時代中頃の大型の土坑からは多くの土器が出土し、平城京の人々の営みを示しています。この周囲には短期間で建て替えられた建物や柵なども確認されており、工房などが置かれた区画ではないかと考えられる成果となりました。今回の調査地から三条大路を挟んだ北側では平成 18 年に当研究所が発掘調査を行い、奈良時代を通じた遺構や遺物が確認されています。今後の調査研究の進展に期待したいと思います。

昨今、世間の風潮は文化財を観光資源・文化資源として活用してゆくべし、という方向へ流れていると聞きます。もちろん、活用して初めてその価値が生きるのが文化財であることは間違いありません。しかし、文化財を生かすためには、地道な調査研究がまず必要であることも事実です。調査研究と資源活用は今後も車の両輪として調和してゆくことが望まれます。

最後になりましたが、今回の発掘調査に際して多大なるご協力をいただきました野村不動産株式会社西日本支社様、調整・指導をいただきました奈良県、奈良市教育委員会をはじめ、ご協力をいただきました関係各位に深く感謝の意を表したいと思います。

令和３年９月 30 日

公益財団法人　元興寺文化財研究所
理事長　辻村泰善

例言

1. 本書は平城京左京四条四坊九坪において、共同住宅建設に先立ち実施した発掘調査（HJG13 次）の成果をまとめたものである。
2. 調査地は奈良市三条宮前町 2-6 に所在し、開発面積 1,146.93㎡のうち調査対象面積は 200㎡である。
3. 調査は野村不動産株式会社西日本支社より委託を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所が行い、令和 2 年 8 月 17 日～同年 9 月 18 日を現地調査、同年 10 月 1 日～令和 3 年 9 月 30 日を整理期間とした。
4. 発掘調査は佐藤亜聖（公益財団法人元興寺文化財研究所）が担当し、村田裕介、武田浩子（公益財団法人元興寺文化財研究所）、吉田芽依（大阪市立大学大学院）、小久保茉優（立命館大学）、大崎拳斗（天理大学）、小林友佳（奈良大学）、三井 淳（同）、溝上千穂（立命館大学大学院）が補佐した（所属は当時）。
5. 調査地の座標および基準点測量は、公益財団法人元興寺文化財研究所が実施し、株式会社文化財サービスが分担した。
6. 発掘調査における土工等土木部門は株式会社島田組が担当した。
7. 遺構写真撮影は佐藤が、遺物写真撮影は大久保治（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
8. 出土遺物の実測および浄書、ないし図面等の整理作業は、仲井光代、武田、芝 幹、山本知佳（公益財団法人元興寺文化財研究所）が行った。
9. 本書に使用した土器の分類、編年、年代観については以下の文献を参照した。本文中で触れる分類名、年代表記はこれらに依拠している。

   古代の土器研究会　1992『古代の土器（1）都城の土器集成』

   古代の土器研究会　1993『古代の土器（2）都城の土器集成』

   神野 恵・森川 実　2010「土器類」『図説平城京事典』柊風社

   奈良国立文化財研究所　1976『平城宮発掘調査報告書Ⅶ』

   奈良国立文化財研究所　1982『平城宮発掘調査報告書Ⅺ』

   西 弘海　1987『土器様式の成立とその背景』真陽社
10. 発掘調査及び整理報告書作成にかかる費用については、野村不動産株式会社西日本支社が全額負担した。
11. 当該調査において出土した遺物、実測図、写真は奈良市教育委員会において保管している。
12. 本書の執筆は第 4 章を木沢直子（公益財団法人元興寺文化財研究所）、第 5 章を村田、佐藤、そのほかを村田が行った。本書の編集は村田が行い、芝がこれを補佐した。
13. 発掘調査及び報告書作成に際しては、以下の方々からのご助言、ご協力を頂いた。記して感謝申し上げたい。

    奈良市教育委員会、奈良県文化財保存課、原田香織（敬称略、順不同）

目次

第１章　調査に至る経緯と調査体制 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査体制 …… 1
　第３節　調査の経過（調査日誌抄） …… 2
第２章　周辺の環境と既往の調査 …… 4
　第１節　遺跡の立地と環境 …… 4
　第２節　周辺の既往調査 …… 4
　第３節　本調査の課題 …… 5
第３章　調査の成果 …… 7
　第１節　基本層序と遺構面の認定 …… 7
　第２節　奈良時代の遺構と遺物 …… 7
　　第１項　遺構 …… 7
　　第２項　遺物 …… 15
第４章　自然科学分析 …… 28
　第１節　樹種同定 …… 28
第５章　調査のまとめ …… 31
　第１節　条坊との関係 …… 31
　第２節　坪内の分割について …… 33
　第３節　まとめ …… 33

図版目次

図 1　調査地位置図（国土地理院『1：25,000 地形図』を改変）（S=1/25,000）…… 4
図 2　今回の調査地と既往の調査地（『平城京条坊総合地図』を改変）（S=1/2,000）…… 6
図 3　全体平面図（S=1/100）…… 8
図 4　壁面土層断面図（S=1/80）…… 9
図 5　SB090 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 10
図 6　SB110 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 11
図 7　SA080 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 12
図 8　SA100 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 13
図 9　SD060・070 平面・土層断面図（S=1/40）…… 14
図 10　SK015 平面・土層断面図（S=1/40）…… 15
図 11　SK030 平面・土層断面・遺物出土状況図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）…… 16
図 12　SB090 出土遺物実測図（S=1/3）…… 17
図 13　SA080・100 出土遺物実測図（S=1/3）…… 18
図 14　SD060 出土遺物実測図（S=1/3）…… 18
図 15　SK015 出土遺物実測図（S=1/3）…… 18
図 16　SK030 黒褐色土出土遺物実測図（1）（S=1/3）…… 20
図 17　SK030 黒褐色土出土遺物実測図（2）（S=1/3）…… 21
図 18　SK030 黒褐色土出土遺物実測図（3）（S=1/3）…… 23
図 19　SK030 黒褐色土出土遺物実測図（4）（S=1/3）…… 24
図 20　SK030 黒褐色土出土遺物実測図（5）（S=1/3）…… 25
図 21　SK030 黒褐色土出土遺物実測図（6）（S=1/3）…… 26
図 22　SK030 淡褐色土・貼床出土遺物実測図（S=1/3）…… 26
図 23　木材組織顕微鏡写真…… 30
図 24　調査区と坊間東小路の推定断面模式図…… 31
図 25　遺構変遷図 …… 32
図 26　検出遺構配置略図（S=1/100）…… 37

表目次

表 1　樹種同定対象資料 …… 28
表 2 ～ 4　報告遺物一覧（1）～（3）…… 38 ～ 40
表 5 ～ 7　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（3）…… 41 ～ 43

写真図版目次

図版 1
　調査前風景（北東から）
　調査区東半遺構検出状況（北から）
図版 2
　調査区東半全景（北から）
　調査区西半全景（北東から）
図版 3
　東壁土層断面北端（西から）
　南壁土層断面西端（北から）
図版 4
　SB090・110 検出状況（西から）
　SB090a 土層断面（北から）
図版 5
　SB090b 土層断面（北から）
　SB090d 土層断面（北から）
図版 6
　SB090e 土層断面（北から）
　SB090g 土層断面（北から）
図版 7
　SB090h 土層断面（北から）
　SB090j・SA080f 土層断面（北から）
図版 8
　SB090k 土層断面（北から）
　SB110b 土層断面（南から）
図版 9
　SB110h 土層断面（北から）
　SA080d 土層断面（北から）
図版 10
　SA080a 土層断面（西から）
　SA080e 土層断面（北から）
図版 11
　SA080i 土層断面（南から）
　SA080j 土層断面（西から）
図版 12
　SA100a 土層断面（北から）
　SA100b 土層断面（北から）
図版 13
　SD060 土層断面（西から）
　SD070 土層断面（西から）
図版 14
　SK015 土層断面（北から）
　SK030 遺物出土状況（北西から）
図版 15
　SK030 遺物出土状況（南東から）
　SK030 土層断面 b-b' 東半（北から）
図版 16
　SK030 土層断面 b-b' 西半（北から）
　SK030 完掘状況（東から）
図版 17
　SB090 出土遺物
図版 18
　SB090、SA080、SK015、SK030 出土遺物
図版 19 ～ 27
　SK030 出土遺物

第１章　調査に至る経緯と調査体制

第１節　調査に至る経緯

令和２年３月 16 日付けで野村不動産株式会社西日本支社より、共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の届出が提出された。当地が平城京の範囲であることから、令和２年４月 20 日に奈良県文化財保存課より奈良市教育委員会を通じて発掘調査の実施が指示された。これを受けて奈良市教育委員会は発掘調査実施に向けた協議を開始したが、工期を勘案した結果、公共機関による発掘調査は困難と判断されたため、公益財団法人元興寺文化財研究所へ発掘調査を依頼することとなった。

令和２年７月 31 日に奈良県文化財保存課より発掘調査の依頼を受けた公益財団法人元興寺文化財研究所は、同年８月 11 日、平城京左京四条四坊九坪発掘調査業務に係る委託契約を野村不動産株式会社西日本支社と締結、発掘調査届出を提出のうえ、同年８月 17 日より現地調査を開始した。

現地調査は令和２年９月 18 日に終了し、その後すみやかに整理・報告書作成業務に移行した。現地調査から報告書作成に至る間、野村不動産株式会社西日本支社の全面的な支援・協力があった。また、奈良県文化財保存課、奈良市教育委員会からの適切なご指導を賜った結果、調査・整理作業を無事に終了することが出来た。関係各位に感謝する次第である。

第２節　調査体制

発掘調査並びに整理・報告書作成は以下の体制で実施した。

（発掘調査）

調査指導：奈良県・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　辻村泰善（兼務、令和２年７月まで）

田邉征夫（令和２年７月から）

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー　金山正子

主　務　佐藤亜聖（現地調査担当）

研究員　村田裕介

研究員　坂本　俊

現地作業員：株式会社島田組

測　　量：公益財団法人元興寺文化財研究所・株式会社文化財サービス

（整理・報告書作成）

調査指導：奈良県・奈良市教育委員会

調査主体：公益財団法人元興寺文化財研究所

理 事 長　辻村泰善

所　　長　田邉征夫

事務局長　江島和哉

総合文化財センター長　塚本敏夫

文化財調査修復研究グループ

リーダー　金山正子

研究員　村田裕介　（整理報告担当）

研究員　坂本　俊

研究員　瀬戸哲也　（令和３年６月から）

技　師　江浦　洋　（令和３年６月から）

第３節　調査の経過（調査日誌抄）

令和２年

8 月 17 日（月）　重機、機材搬入。奈良市教育委員会立会いのもと、調査区の設定および重機掘削を行う。

8 月 18 日（火）　重機掘削。調査区東半の遺構検出状況写真撮影。

8 月 19 日（水）　重機掘削。素掘小溝から掘削開始。

8 月 20 日（木）　重機掘削完了。地区杭打設。

8 月 21 日（金）　SK010・020 掘削開始。SK010 は近代以降の掘削であることが判明。

8 月 24 日（月）　調査区西半の遺構検出状況写真撮影。

8 月 25 日（火）　SK030 掘削開始。

8 月 26 日（水）　SK030 の掘削継続。壁面には板の痕跡がみられる。

8 月 27 日（木）　SK030 出土の須恵器壺に漆の付着を確認。

8 月 28 日（金）　SK030 に貼床と壁溝を確認するが、柱穴はみられない。

8 月 31 日（月）　SK030 は出土遺物から平城宮土器Ⅲ頃のものか。

9 月　1 日（火）　SK030 遺物出土状況写真撮影。

9 月　2 日（水）　調査区西側に東西三間、南北三間の総柱建物を確認。

9 月　3 日（木）　雨天のため現場図面の点検、整理を行う。

9 月　4 日（金）　台風接近のため、大雨強風の対策をする。

9 月　7 日（月）　SK040・050 完掘写真撮影。

9 月　8 日（火）　調査区壁面精査。

9 月　9 日（水）　調査区全景写真撮影。

9 月 10 日（木）　柱穴の掘削開始。

9 月 11 日（金）　SB090 に先行する掘立柱建物を確認（SB110）。

9 月 16 日（水）　SK030 の土層図作成。調査区壁面の土層図の作成も行う。

9 月 17 日（木）　壁面土層図の作成完了。SK030 の土層確認用セクションの掘削を終え、現地調査が完了。午後から埋め戻しを開始する。

9 月 18 日（金）　埋め戻し完了、機材撤収、現地調査終了。

SK030 掘削風景

第 2 章　周辺の環境と既往の調査

第 1 節　遺跡の立地と環境

調査地は奈良市三条宮前町 2-6 に所在し、平城京の条坊復原では左京四条四坊九坪の北東隅にあたる。調査前は北半部に建物、南半部に駐車場が存在する状況であり、それ以前は 1950 年代までは水田、1960 ～ 80 年代には南・北 2 棟の旧建物があったことが分かっている。1991 年の現建物建設に先立つ試掘（市 1991-16 次調査：奈良市教育委員会 1992）では、対象地の北側については遺構が残存しないことが確認されている。

調査地の周辺は、能登川から分かれた菩提川により形成された扇状地の扇端付近に位置し、北東から南西へ向かって緩やかに下る地形となっている。調査地は東の低位段丘面から谷底平野へと転換する地点付近に位置する（独立行政法人産業技術総合研究所 2014）。

第 2 節　周辺の既往調査

調査地の北側には三条大路、東側には東四坊坊間東小路が想定されている。調査地西側隣接地では 1987 年の橿原考古学研究所による調査で東西溝が見つかっており、三条大路南側溝の可能性が考えら

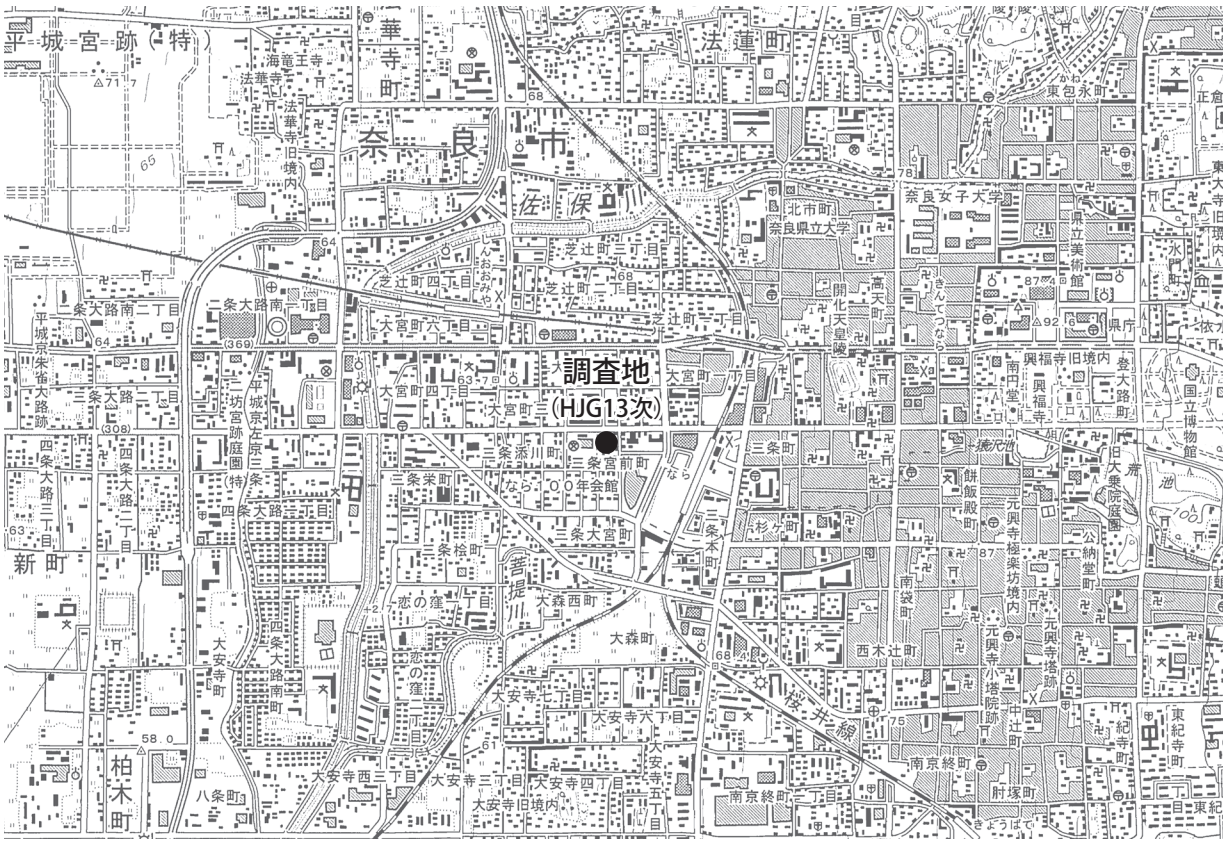


図 1　調査地位置図（国土地理院『1：25,000 地形図』を改変）（S=1/25,000）

れている（奈良県立橿原考古学研究所 1987）。また、調査地からは三条大路を隔てた北側で行われた奈良市教育委員会による第 413 次調査では三条大路北側溝の北肩が確認されている。ここでは和同開珎の鋳放し銭が見つかっており、私鋳銭も含めた和同開珎の鋳造に関わる施設の存在が想定されている（奈良市教育委員会 1999）。

九坪内の調査では、ほかに 1983 年の奈良国立文化財研究所による調査（奈文研 141-9 次）がある。九坪の北西部の調査で、今回の調査区のほぼ真西に位置する。東四坊坊間路の東西側溝が検出され、遺構は 3 時期の変遷が考えられている。坪内を南北に 4 分割する溝や柵も検出されており、九坪内の利用状況を考えるうえで重要である。ここでは約 100 枚の和同開珎が緡銭の形状で見つかっているほか、羊形硯が出土しており、注意が必要である（奈良国立文化財研究所 1983）。

なお、左京四条四坊には太安万侶をはじめとした中・下級貴族の居住が知られており、この地区が貴族の居住域であったと考えられる。

第３節　本調査の課題

以上のような周辺の調査成果を踏まえると、本調査では、これまでに確認されている奈良時代の遺構の展開、および奈良時代の坪内利用のあり方と変遷の解明を主な課題とした。また、宅地内での鋳造などの手工業生産に関わる遺構・遺物の検出についても課題とした。

《参考・引用文献》

独立行政法人産業技術総合研究所 2014『平成 25 年度「活断層の補完調査」成果報告書　奈良盆地東縁断層帯』
奈良国立文化財研究所 1983『平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告』
奈良市教育委員会 1992「1　小規模確認調査・試掘調査」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書－平成 3 年度－』
奈良市教育委員会 1999「平城京左京三条四坊十二坪の調査　第 413 次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書－平成 10 年度－』
奈良県立橿原考古学研究所 1987「奈良市三条宮前町 49 番地（平城京左京四条四坊九坪）の調査」『奈良県遺跡調査概報 1987 年度』
奈良文化財研究所 2003『平城京条坊総合地図』

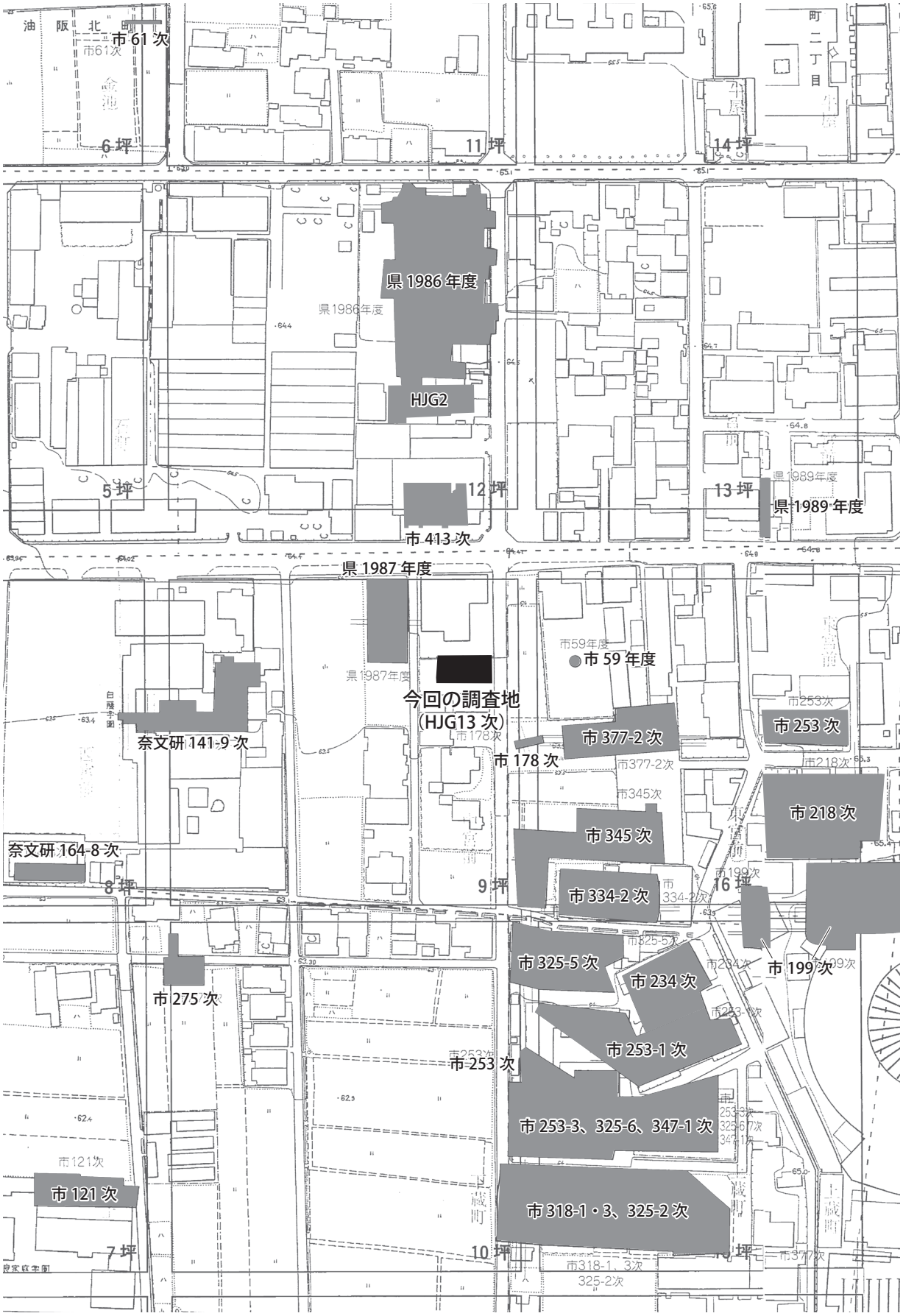


図２　今回の調査地と既往の調査地（『平城京条坊総合地図』を改変）（S=1/2,000）

第３章　調査の成果

第１節　基本層序と遺構面の認定

調査区は敷地北側が既存建物により破壊されていると考えられることから、敷地南側へ東西約 20m、南北約 10m で設定した。

調査区の現地表面は標高約 63.3m で、東西南北ほぼ比高差なく平坦である。現代の攪乱が著しいため層序は一定でないが、おおよそ層厚約 50cm の現代盛土、層厚 10 ～ 50cm の近現代耕作土、層厚 10cm の近世耕作土を除去すると大阪層群構成層を母材とする細砂層が存在し、遺構面はこの細砂上面、標高 62.5m で検出した。細砂は遺物を含まず、細砂以下のシルト層からも遺物の出土は見られない。

第２節　奈良時代の遺構と遺物

第１項　遺構

掘立柱建物

SB090（図 5、図版 4 ～ 8）

調査区西側で検出した。重複関係から SA080 に先行し、SB110 に後出する。東西三間、南北三間以上の規模を持つ。柱間は東西が 1.45 ～ 1.75m、南北が 1.83 ～ 1.95m、主軸方向は北で西へ 0° 11′ 振れるものである。柱穴は一辺 0.6 ～ 1.0m 程度の隅丸方形を呈する。柱材は大半が抜き取りを行うが、柱穴 b には径 20cm の柱材が残存する。

出土遺物は平城宮土器Ⅲに属するもので、奈良時代中頃に造営、廃絶したと考えられる。

SB110（図 6、図版 4・8・9）

調査区西側で検出した。重複関係から SA080、SB090、SK030 に先行する。東西三間、南北二間の規模を持つが、南東部は SK030 により失われている。柱間は東西が 2.45 ～ 1.60m、南北が 1.52 ～ 1.61m、主軸方向は北で東へ 2° 21′ 振れるものである。柱穴は一辺 0.6 ～ 0.8m 程度の隅丸方形を呈する。柱材は大半が抜き取りを行う。

出土遺物は細片のため図示できなかったが、重複関係などから奈良時代中頃のものと考えられる。

柵

SA080（図 7、図版 7・9 ～ 11）

調査区北側で検出した。重複関係から SB090、SA100 に後出する。東西八間、南北一間以上の規模を持つ。柱間は東西が 1.94 ～ 2.17m、南北が 2.45m を測り、東西方向の柱間が南北に比べて短くなっている。主軸方向は北で西へ 1° 52′ 振れるものである。柱穴は一辺 0.5m 程度とやや小振りで、平面形態は隅丸方形を呈する。柱材は大半が抜き取りを行うが、柱穴 f および柱穴 i には径 15cm 程度の柱材が残存する。

出土遺物は平城宮土器Ⅳに属するもので、奈良時代後半に廃絶したと考えられる。

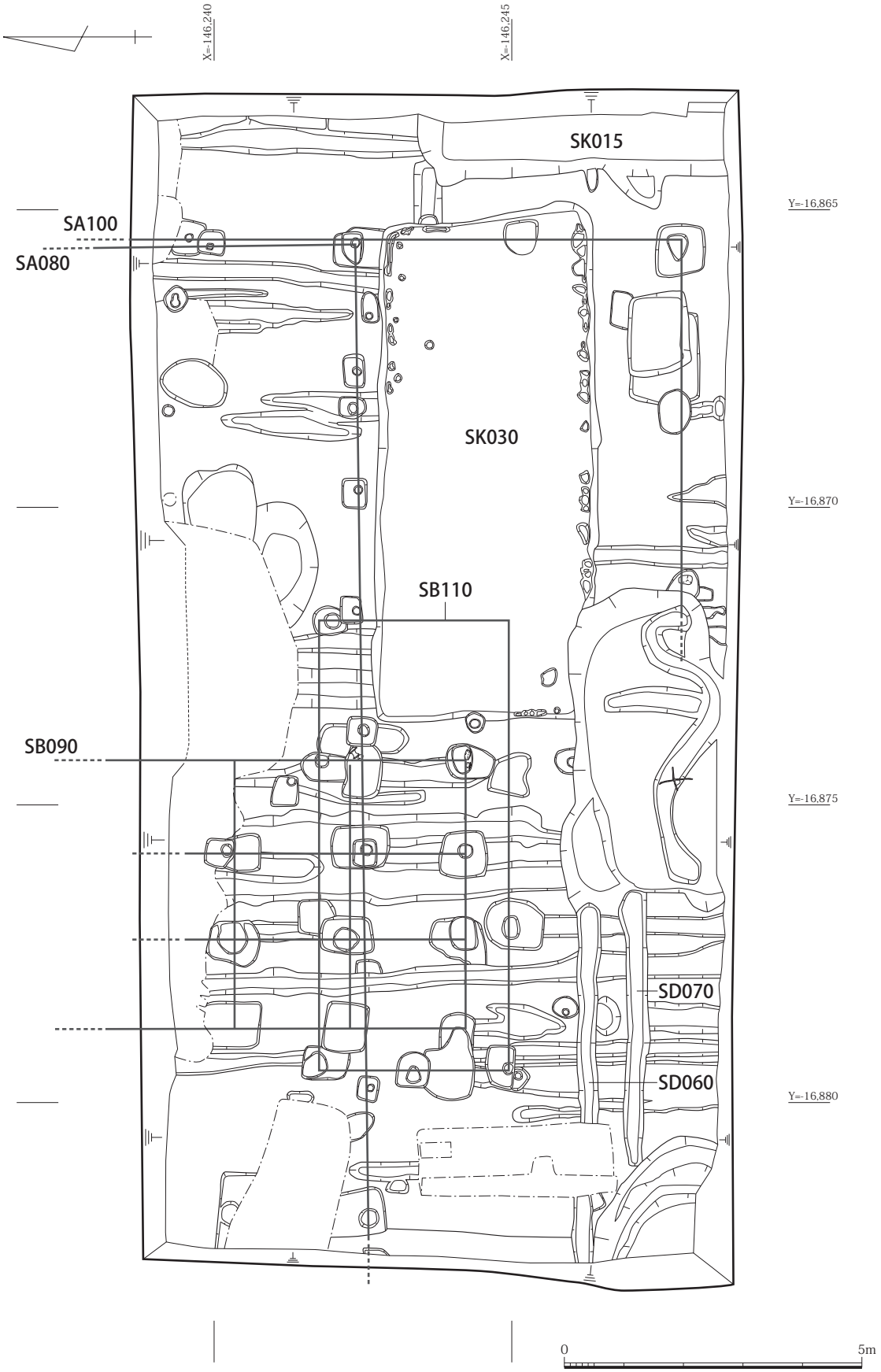
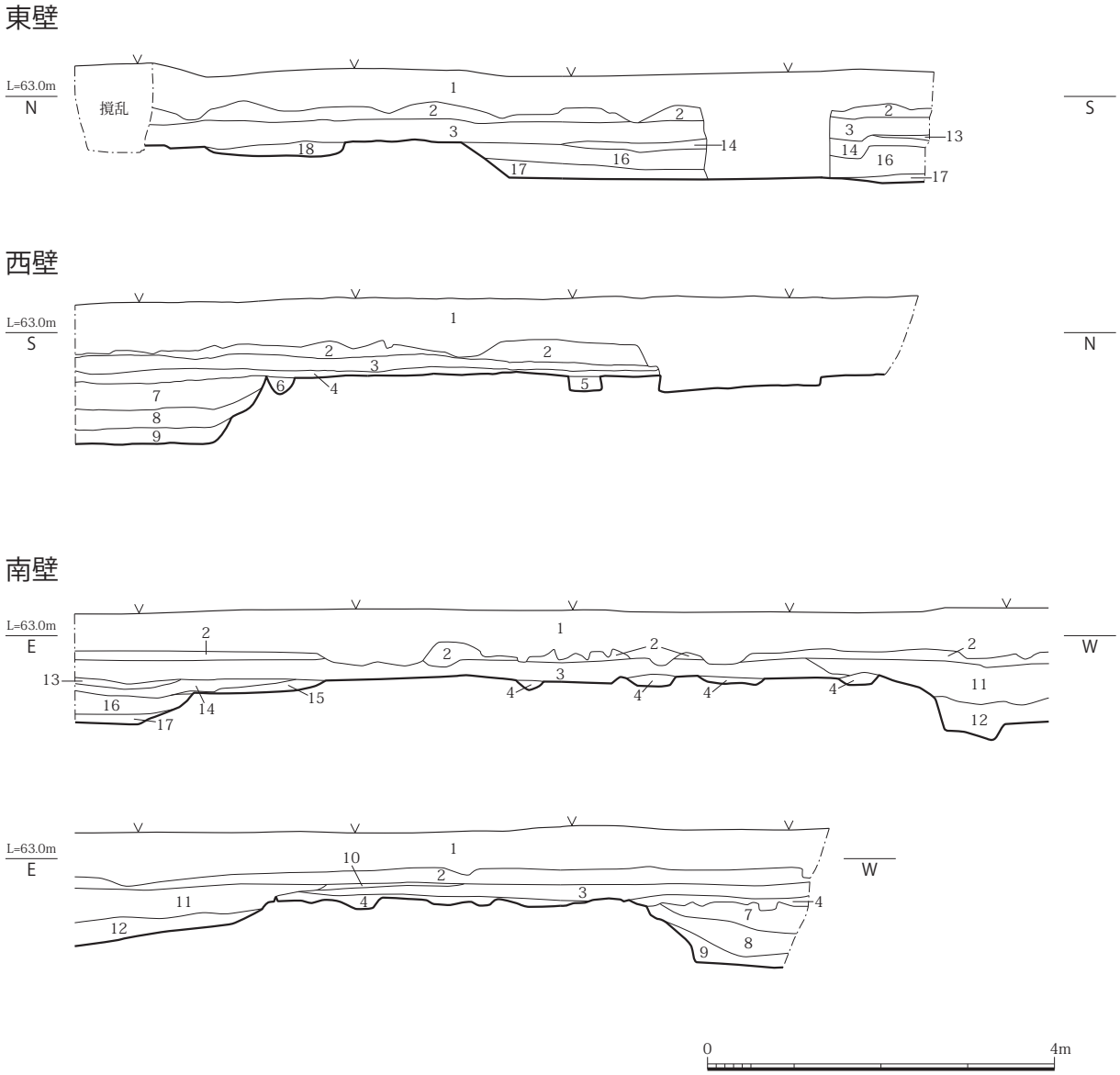
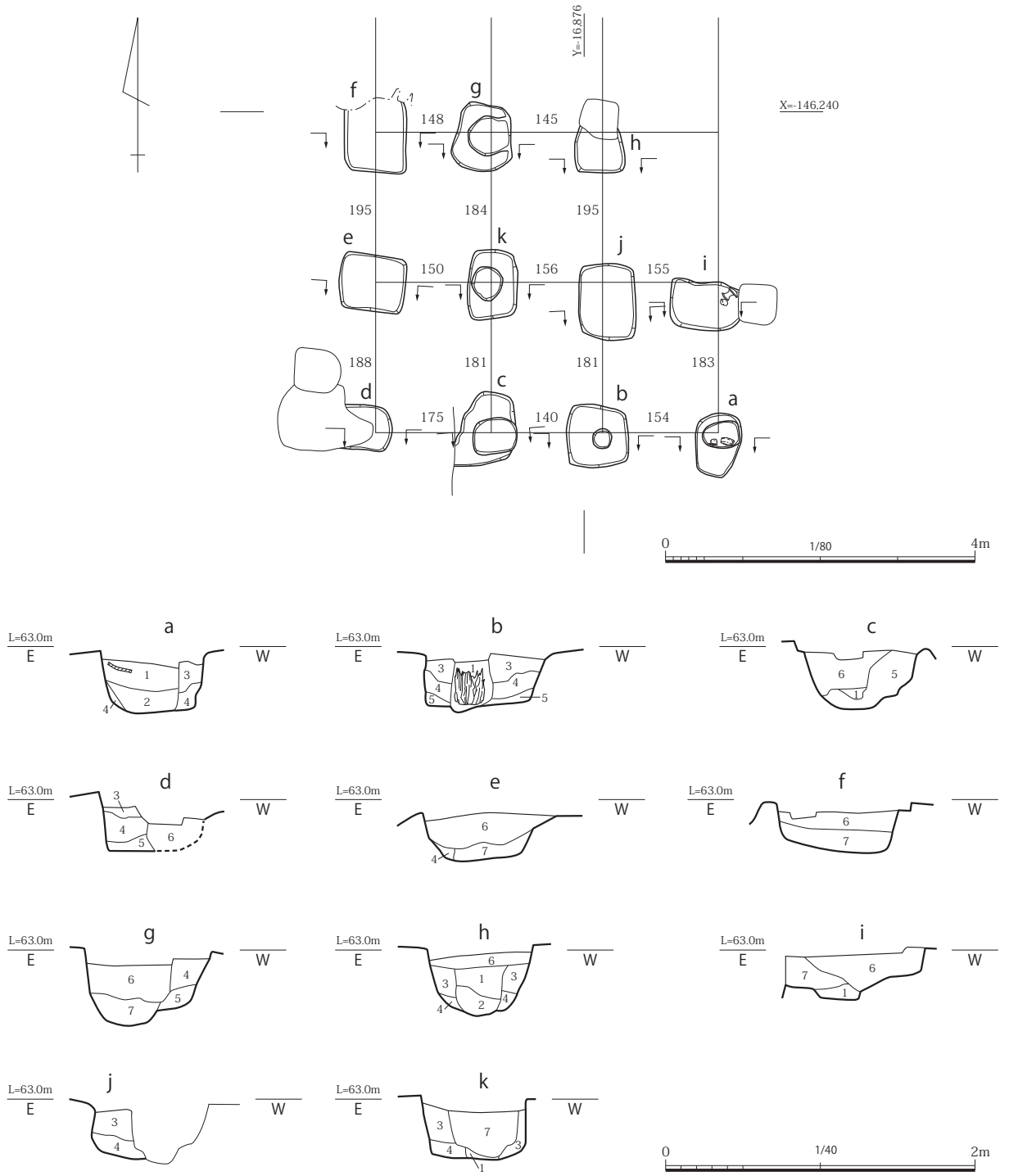


図 3　全体平面図（S=1/100）



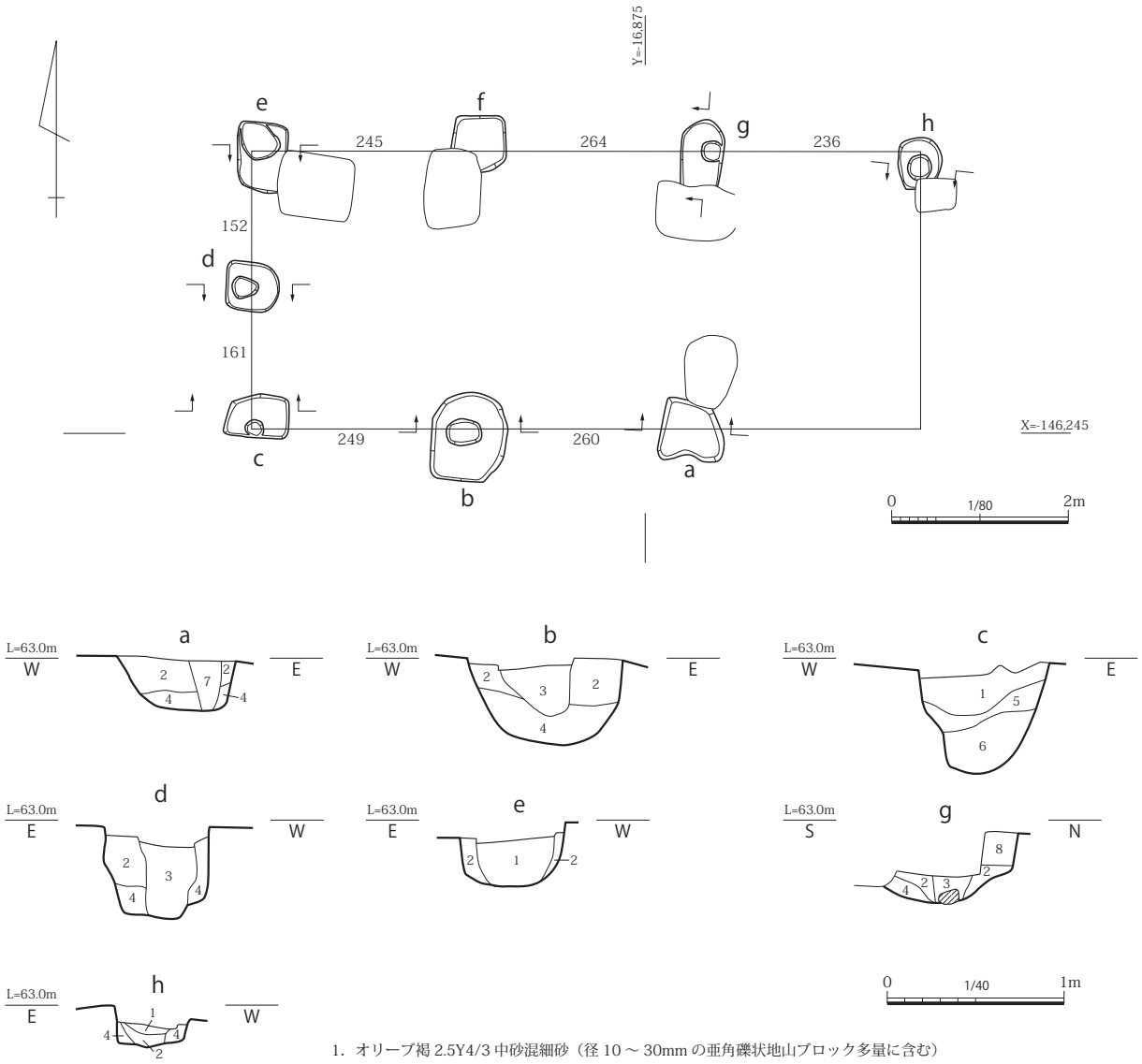
1. 現代盛土
2. オリーブ黒 5Y2/2 中砂（礫、炭化物多く含む）（現代耕作土）
3. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂（炭化物を少量含む、一部薄層形成）（近現代耕作土）
4. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂混細砂（素掘溝埋土）
5. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（径 30 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロックを多く含む）（柱穴）
6. 褐灰 10YR4/1 中砂（径 300 ～ 500mm の地山ブロック含む）
7. 黄褐 2.5Y5/4 粗砂混中砂（礫、径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
8. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂混粗砂（礫、径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
9. 黄褐 2.5Y10/3 粗砂混中砂（径 10 ～ 100mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
10. 暗灰黄 2.5Y4/2 粗砂混中砂（炭化物少量含み、ラミナ形成）
11. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂（径 100 ～ 200mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
12. オリーブ褐 2.5Y4/4 中砂（地山ブロックを主とする）
13. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂（炭化物少量含む）
14. 黒褐 10YR3/1 中砂（炭化物多量に含む）
15. 黄褐 2.5Y10/3 粗砂（ラミナ形成）
16. 暗灰黄 2.5Y4/2 中砂（径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多く含む）
17. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂（径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多く含む）
18. 褐灰 10YR4/1 細砂（径 50 ～ 200mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）

図４　壁面土層断面図（S=1/80）



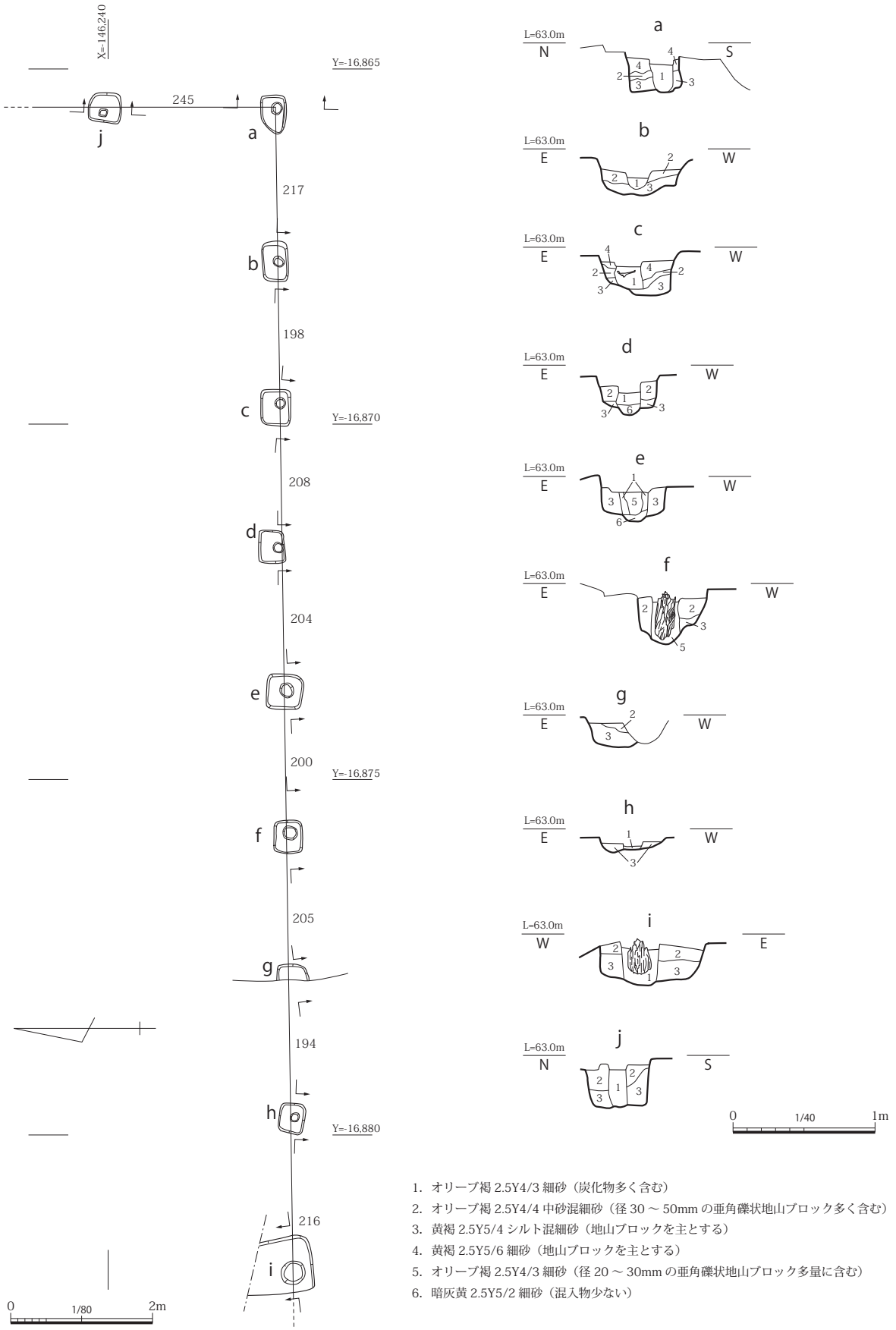
1. 黒褐 2.5Y3/2 細砂（炭化物多量に含む）
2. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック・炭化物多く含む）
3. 黄褐 2.5Y5/4 中砂混細砂（径 50 ～ 70mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
4. 黄褐 2.5Y5/6 中砂混細砂（地山ブロックを主とする）
5. 黄褐 2.5Y5/4 中砂（径 30 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
6. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂混細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
7. 黒褐 2.5Y3/2 中砂（径 50mm 前後の亜角礫状地山ブロック多量に含む）

図 5　SB090 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）



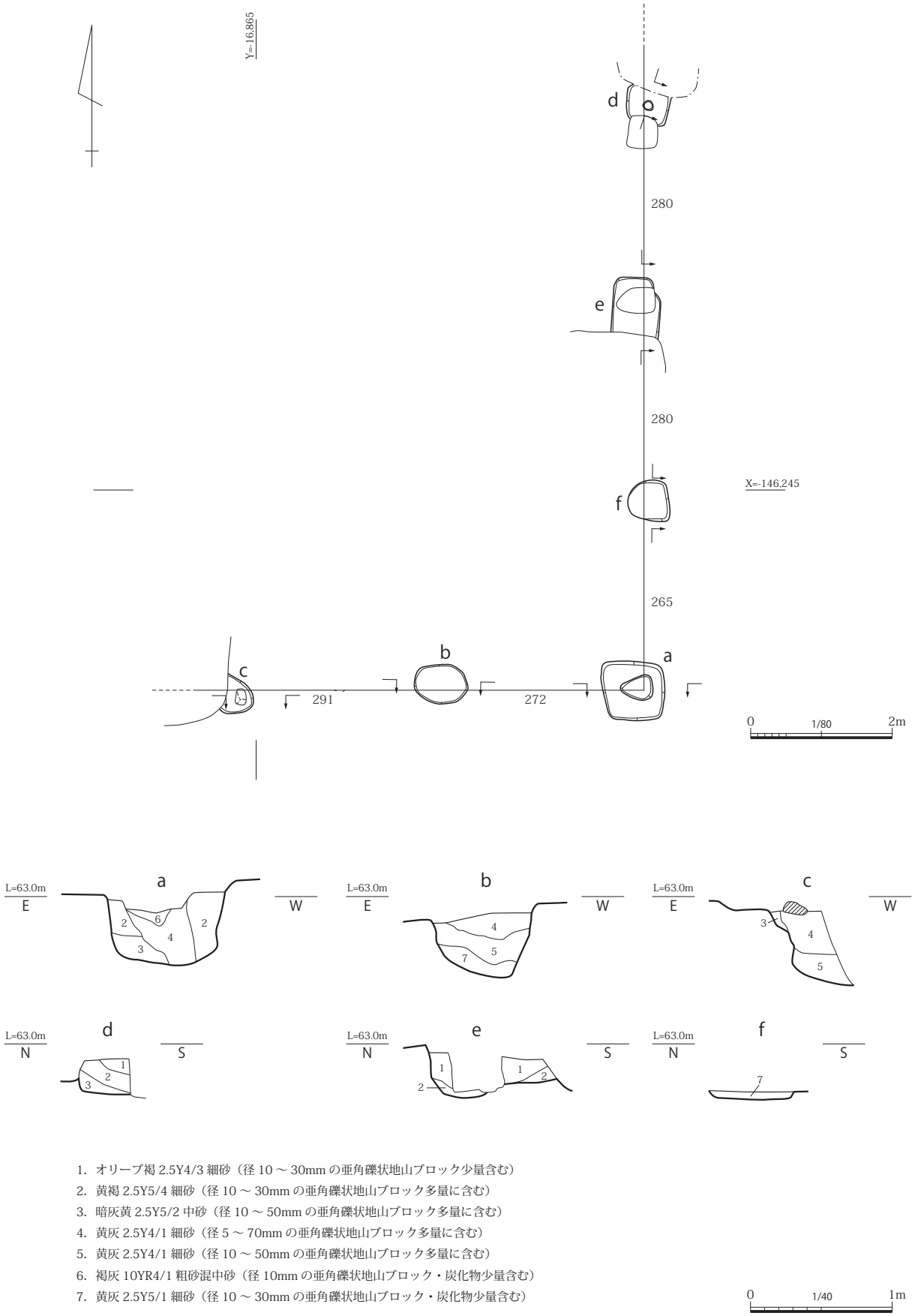
1. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂混細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
2. 黄褐 2.5Y5/4 細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック大量に含む）
3. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（炭化物・径 10mm 前後の亜角礫状地山ブロック少量含む）
4. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂（径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック大量に含む）
5. 黄褐 2.5Y5/6 中砂混細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック、灰色砂ブロック多く含む）
6. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂混細砂（径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック、暗褐色土ブロック多く含む）
7. 黄灰 2.5Y4/1 細砂（混入物少ない）
8. オリーブ褐 2.5Y4/3 中砂混細砂（径 10 mm 前後の亜角礫状地山ブロック多量に含む）

図 6　SB110 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）



1. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（炭化物多く含む）
2. オリーブ褐 2.5Y4/4 中砂混細砂（径 30 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多く含む）
3. 黄褐 2.5Y5/4 シルト混細砂（地山ブロックを主とする）
4. 黄褐 2.5Y5/6 細砂（地山ブロックを主とする）
5. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（径 20 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
6. 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂（混入物少ない）

図 7　SA080 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）



1. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック少量含む）
2. 黄褐 2.5Y5/4 細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
3. 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂（径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
4. 黄灰 2.5Y4/1 細砂（径 5 ～ 70mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
5. 黄灰 2.5Y4/1 細砂（径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
6. 褐灰 10YR4/1 粗砂混中砂（径 10mm の亜角礫状地山ブロック・炭化物少量含む）
7. 黄灰 2.5Y5/1 細砂（径 10 ～ 30mm の亜角礫状地山ブロック・炭化物少量含む）

図 8　SA100 平面・土層断面図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）

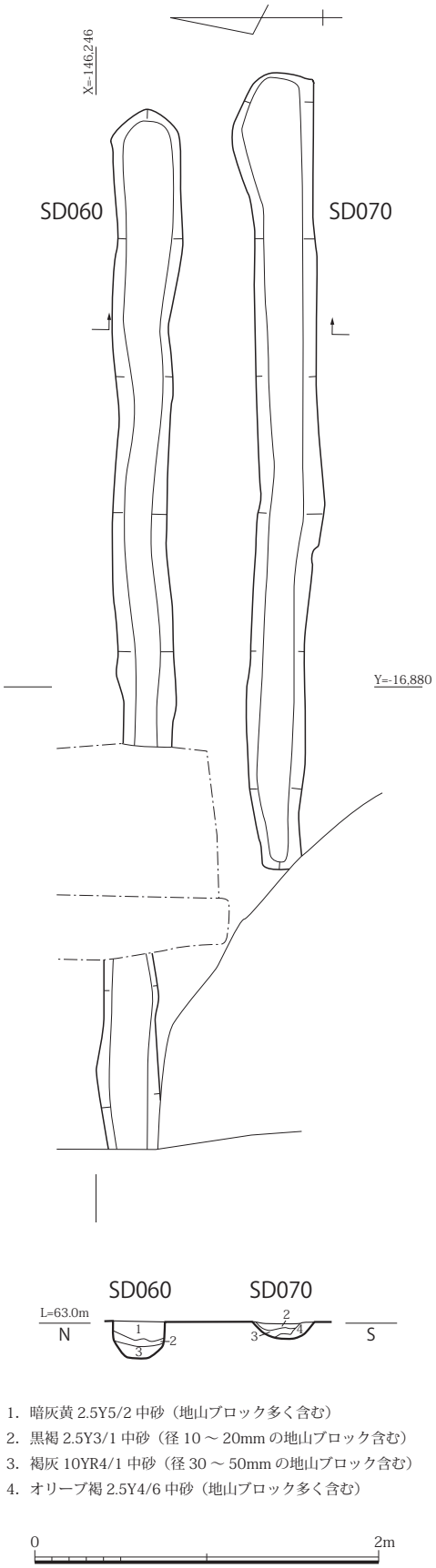


図 9　SD060・070 平面・土層断面図（S=1/40）

SA100（図 8、図版 12）

調査区東側で検出した。重複関係から SA080 に先行する。東西南北それぞれ三間以上の規模を持つ。柱間は東西が 1.45 ～ 1.75m、南北が 1.83 ～ 1.95m、主軸方向は北で東へ 0° 33′ 振れるものである。柱穴は一辺 0.6 ～ 0.9m 程度の隅丸方形を呈する。柱材は大半が抜き取りを行うが、一部に残る痕跡からは径 20cm 程度の柱の存在が考えられる。

出土遺物は平城宮土器Ⅲに属するもので、奈良時代中頃に廃絶したと考えられる。

溝

SD060（図 9、図版 13）

調査区南西隅で検出した。幅 0.3m、深さ 0.2m を測り、断面形態は「U」字形を呈する。主軸方向は西で北へ 1° 06′ 振れるものである。埋土には地山ブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻しによる埋没と考えらえる。流水の痕跡はない。

出土遺物には須恵器壺蓋があり、奈良時代後半のものと考えられる。

SD070（図 9、図版 13）

調査区南西隅で検出した。前述の SD060 とは溝心間で約 0.8m 南に位置する。幅 0.45m、深さ 0.1m を測り、断面形態は浅い「U」字形を呈する。主軸方向は西で北へ 0° 44′ 振れるものである。埋土は SD070 の特徴と類似しており、同時期に利用されていた可能性がある。

出土遺物は小片が多く図化できなかったが、規模や方向が似るため SD060 と同時期のものと考えられる。

土坑

SK015（図 10、図版 14）

調査区南東隅で検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、平面規模は検出した範囲で南北 5.15m、東西 1.21m、深さ 0.4m を測る。断面形態は逆台形を呈する。埋土は大きく 2 層からなり、上層から黒褐色中砂、灰褐色中砂である。灰褐色中砂は地山ブロックを多く含むことから、人為的な埋め戻しによる埋没と考えられる。

出土遺物は遺存状態が良好でないが、平城宮土器Ⅲ～Ⅳに属するものと考えられる。

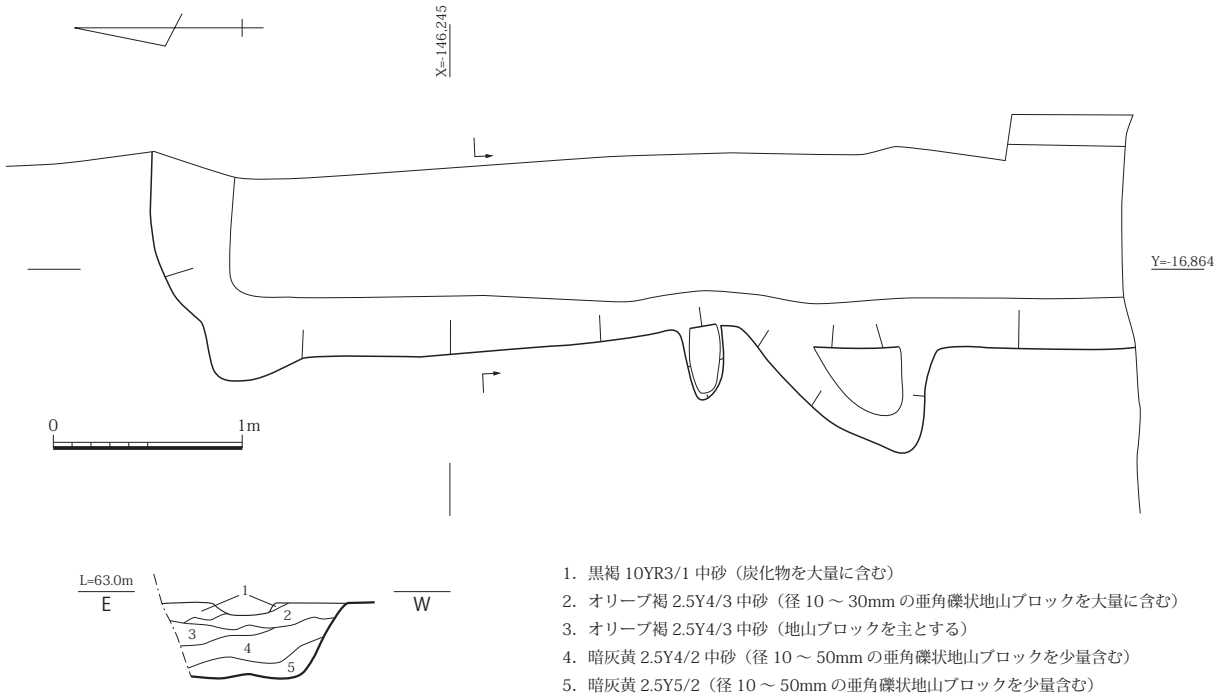


図 10 SK015 平面・土層断面図（S=1/40）

SK030（図 11、図版 14 ～ 16）

調査区東半で検出した。重複関係から SB110、SA100 に後出する。平面形態は方形を呈し、平面規模は検出した範囲で南北 3.94m、東西 8.71m、深さ 0.25m を測る。断面形態は逆台形を呈する。埋土は大きく 2 層からなり、上層から黒褐色中砂、淡褐色細砂であり、その下に地山ブロックを主体とする貼床が築かれる。黒褐色中砂には炭化物、焼土が多く含まれている。壁際には小ピットないし小溝が廻る部分があり、一部では側板の痕跡がみられた。また、底部には平行する南北方向の丸太状の痕跡もみられ、転ばし根太などの施設が存在していた可能性が考えられる。その場合には床が設置されていたことが想定できる。

出土遺物は黒褐色中砂を中心に出土しており、平城宮土器Ⅲに属するものである。奈良時代中頃には廃絶したと考えられる。

第 2 項　遺物

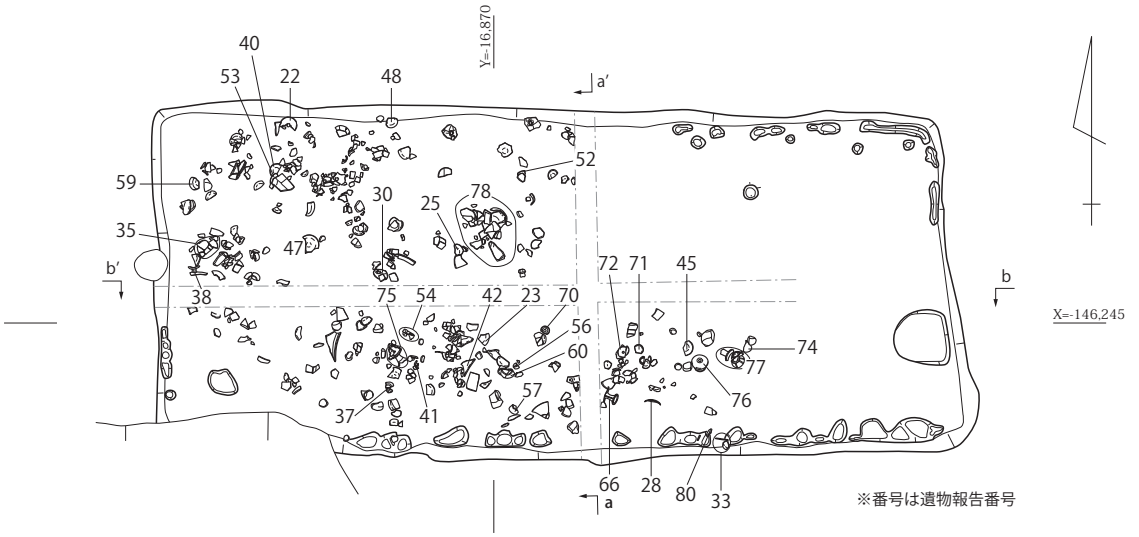
掘立柱建物

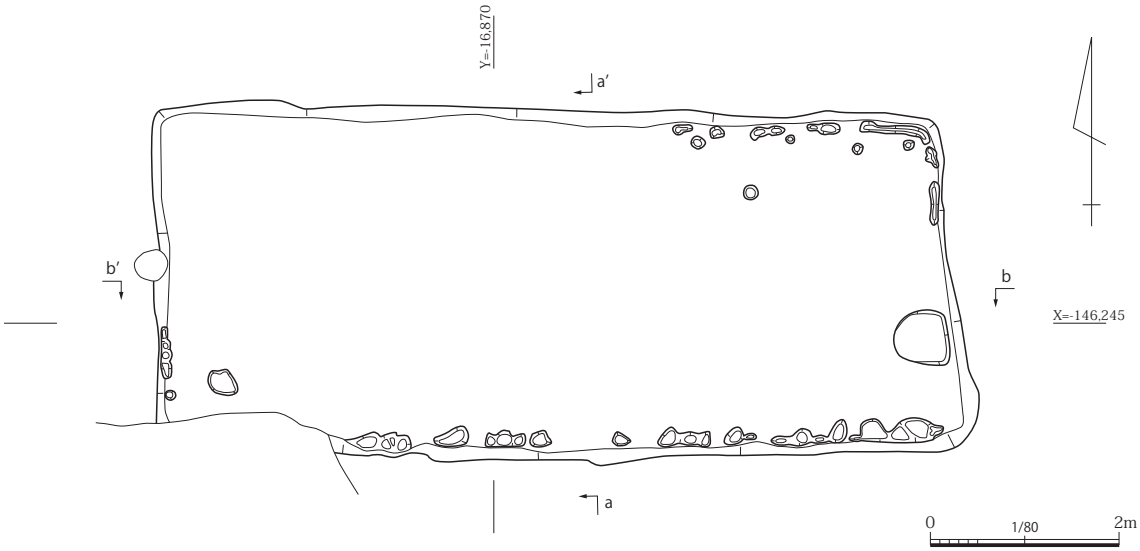
SB090 出土遺物（図 12、図版 17・18）

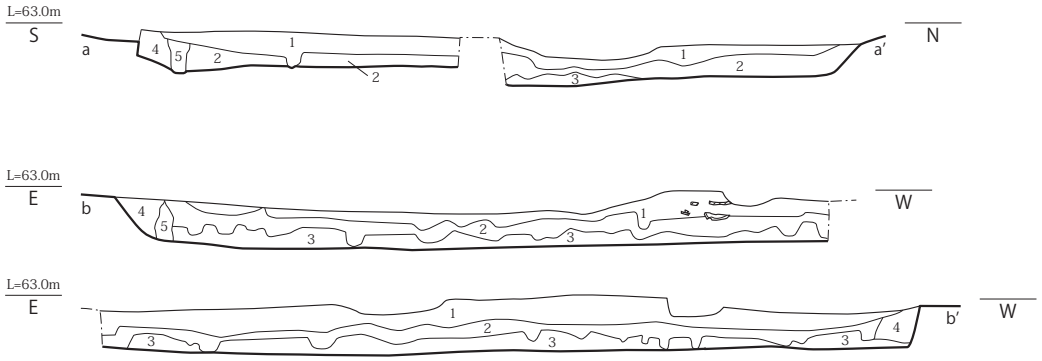
土師器杯（1 ～ 3）　1･2 は杯 A である。1 は内面に斜放射状暗文を粗く施し、口縁部をヨコナデ調整する。2 は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。3 は杯 E である。内面にナデ調整、外面に横方向のヘラミガキ調整を施す。

土師器皿（4・5）　4 は外面は表面劣化のため調整不明であるが、内面に斜放射状暗文を施す。5 は外面は底部から口縁部下半にかけてヘラケズリ調整、口縁部上半にはヨコナデ調整を施す。内面には斜放射状暗文を施す。

土師器椀（6）　椀 C である。内面は表面劣化のため調整不明であるが、外面にはユビオサエ痕が残り、口縁部付近にはヨコナデ調整を施す。



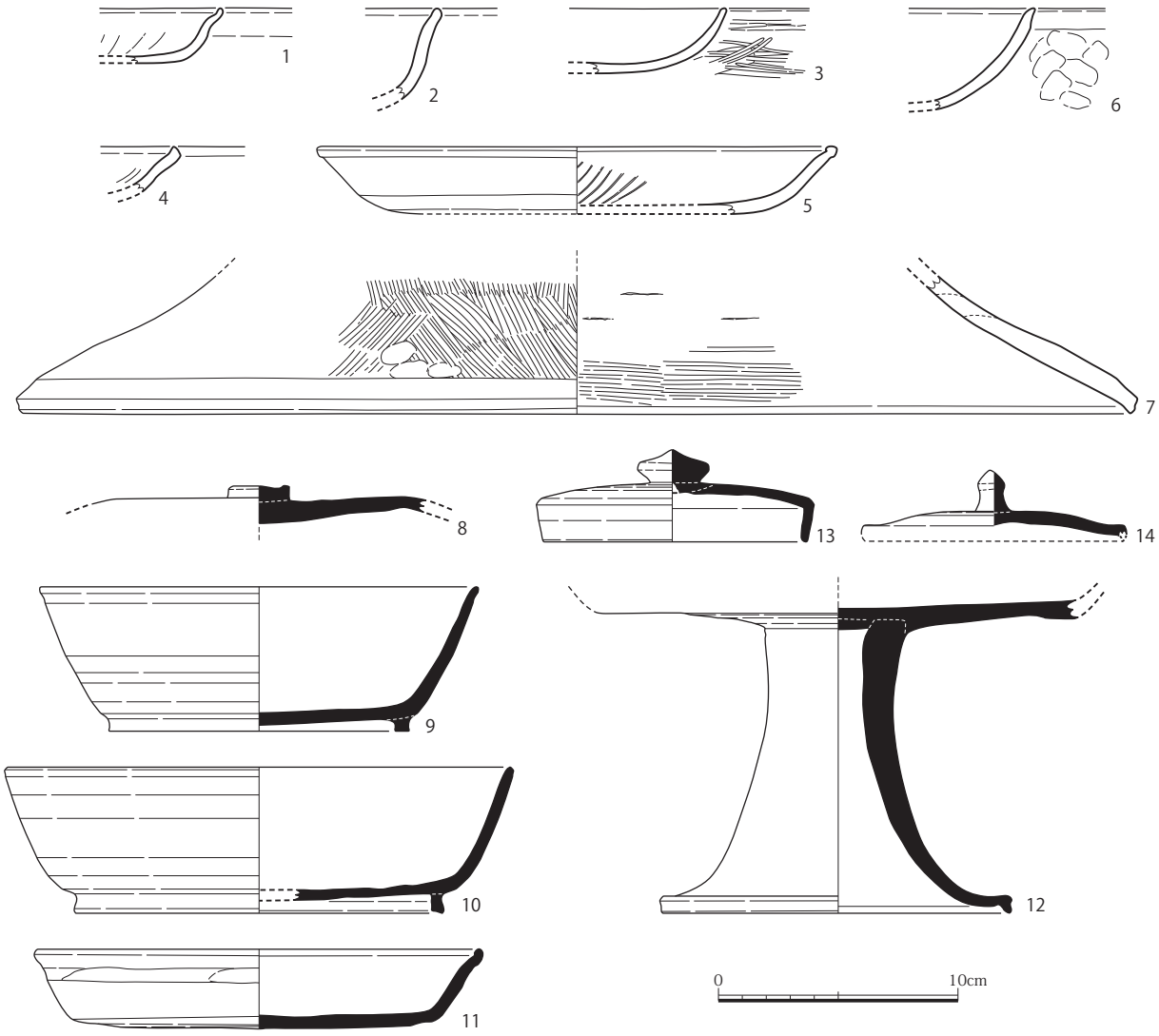




1. 黒褐 2.5Y3/1 細砂混中砂（炭・焼土を多量に含む）
2. オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂（径 10 ～ 50mm の亜角礫状地山ブロック多量に含む）
3. 黄褐 2.5Y5/4 細砂（地山ブロックを主とする）
4. 黄褐 2.5Y5/6 中砂混細砂（地山ブロックを主とする）（掘方？）
5. 暗灰黄 2.5Y5/2 細砂（混入物少ない）（側板の痕跡か？）

0 1/40 1m

図 11 SK030 平面・土層断面・遺物出土状況図（平面 S=1/80・断面 S=1/40）



柱穴 a 抜取（5・6・9・13）　柱穴 b 抜取（3）　柱穴 d 掘方（1・10・11）　柱穴 i 抜取（12）
柱穴 b 掘方（4・8）　柱穴 e 抜取（7・14）　柱穴 k 掘方（2）

図 12 SB090 出土遺物実測図（S=1/3）

土師器蓋（7）　外面に縦方向ないし斜め方向のハケメ調整、内面に横方向のハケメ調整後ナデ調整を施し、口縁端部付近にはヨコナデ調整をする。内面には煤が付着する。

須恵器杯蓋（8）　内外面ともに回転ナデ調整を施し、外面中央付近には回転ヘラケズリ調整を施す。天井部外面にはボタン状のツマミを貼り付ける。内面は平滑になっており、硯に転用された可能性がある。

須恵器杯（9 ～ 11）　9・10 は杯 B である。9 は内外面ともに回転ナデ調整後、口縁部下半に回転ヘラケズリ調整を施す。底部外面には高台を貼り付ける。底部をヘラキリし、回転ヘラケズリ調整後ナデ調整を施す。10 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後ナデ調整を施す。底部外面には高台を貼り付ける。内面底部は平滑となっている。11 は杯 C である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、外面中位にはヨコナデ調整を加える。底部はヘラキリ後無調整で、板状圧痕が残る。胎土は灰白色を呈し、やや粗く、東海産の可能性が考えられる。

須恵器高杯（12）　脚部は内外面ともに回転ナデ調整を施し、端部は下方へ拡張し、外面に面を持つ。

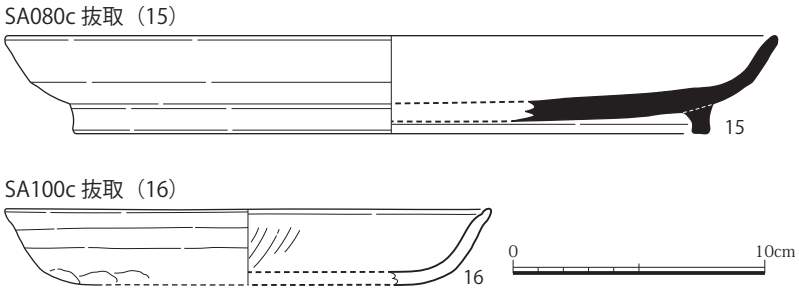


図 13 SA080・100 出土遺物実測図（S=1/3）

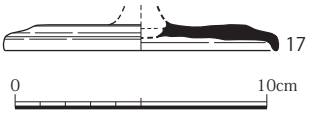


図 14 SD060 出土遺物実測図（S=1/3）

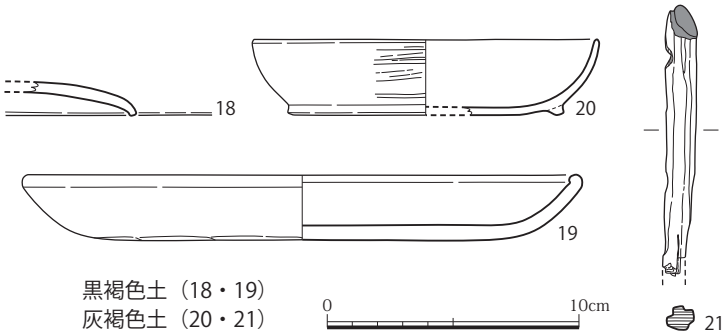


図 15 SK015 出土遺物実測図（S=1/3）

杯部は内外面ともに回転ナデ調整後、底部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。杯部外面にはユビオサエ痕が残る。脚部と杯部の接合は、杯底部に脚頂部を接合する形で行う。

須恵器蓋（13・14） 内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面には回転ヘラケズリ調整を施す。天井部外面には宝珠状のツマミを貼り付ける。14 には重ね焼き痕がみられる。

柵

SA080 出土遺物（図 13、図版 18）

須恵器皿（15） 皿 B である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部外面には回転ヘラケズリ調整を施し、高台を貼り付ける。底部内面には同心円状の工具痕が残るが、ナデ調整により消される。

SA100 出土遺物（図 13）

土師器杯（16） 杯 A である。内面に斜放射状暗文を施し、外面にはナデ調整を施す。底部外面にはユビオサエ痕が残る。

溝

SD060 出土遺物（図 14）

須恵器蓋（17） 内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面の中位には回転ヘラケズリ調整を加える。内面は平滑になっており、硯に転用された可能性がある。

土坑

SK015 出土遺物（図 15、図版 18）

【黒褐色土】

土師器蓋（18） 内外面ともに表面劣化のため調整不明である。

土師器皿（19）　皿Ａである。内外面ともに表面劣化のため調整不明であるが、底部外面にはユビオサエ痕が残る。

【灰褐色土】

土師器杯（20）　杯Ｂである。内面は表面劣化のため調整不明であるが、外面にはヘラミガキ調整を施す。底部外面には高台を貼り付ける。

木製品付け木（21）　片側の端部のみ炭化し、もう一方の端部は欠損している。断面形態は方形を呈するが、側面に調整はみられない。

SK030 出土遺物（図 16 ～ 22、図版 18 ～ 27）

【黒褐色土】

土師器蓋（22・23）　22 は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。天井部外面にはボタン状のツマミを貼り付ける。23 は外面に横方向の分割ヘラミガキ調整、内面にナデ調整を施す。天井部外面にはユビオサエ痕が残る。

土師器杯（24 ～ 27）　24 は杯Ａである。外面にヘラケズリ調整後、横方向のヘラミガキ調整、内面にナデ調整を施し、口縁端部にはヨコナデ調整をする。25 は杯Ｂである。内面は表面劣化のため調整不明であるが、外面には横方向のヘラミガキ調整を施す。底部外面には高台を貼り付ける。高台内部にはナデ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。26 は杯Ｃである。内外面ともにナデ調整を施し、底部外面にはユビオサエ痕が残る。27 は杯Ｅである。外面口縁部付近及び内面全面に黒色漆が付着する。内面は漆付着のため調整不明であるが、外面には横方向のヘラミガキ調整を施す。

土師器皿（28 ～ 33）　いずれも皿Ａである。28 は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。29 は底部外面は表面劣化のため調整不明であるが、ユビオサエ痕が残る。口縁部はナデ調整後、横方向のヘラミガキ調整を施す。内面は見込みにラセン状暗文、見込みから口縁部下半にかけて斜放射状暗文を施す。30 は内外面ともにナデ調整、口縁部にはヨコナデ調整を施す。底部外面にはユビオサエ痕が残る。31 は内面は表面劣化のため調整不明であるが、外面には横方向のヘラミガキ調整を施す。底部外面にはユビオサエ痕が残る。32 は底部内外面ともにナデ調整を施し、底部外面にはユビオサエ痕が残る。口縁部は外面はナデ調整後、横方向のヘラミガキ調整が僅かに残る。内面は見込みにラセン状暗文、見込みから口縁部下半にかけて斜放射状暗文を施す。口縁部内面には連弧状暗文が確認できる。33 は外面は口縁部に横方向のヘラミガキ調整、底部はヘラケズリ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。内面は見込みにラセン状暗文、口縁部下半に斜放射状暗文を施す。

土師器鉢（34・35）　34 は鉢Ｃ底部である。内面及び体部外面は表面劣化のため調整不明である。底部外面にはナデ調整を施し、ユビオサエ痕が残る。高台は貼り付けによる。35 は外面に横方向の粗いヘラミガキ調整、口縁部下半から底部にかけてヘラケズリ調整を施す。内面には横方向の粗いヘラミガキ調整後、体部中位に２段のラセン状暗文を施す。口縁端部付近の外面にはユビオサエ痕が残る。

土師器高杯（36 ～ 38）　36 は脚裾部は外面は表面劣化のため調整不明であるが、内面にナデ調整、端部にヨコナデ調整を施す。脚柱部は外面に縦方向のヘラケズリ調整、内面にナデ調整を施す。杯部は内外面ともに表面劣化のため調整不明である。37 は脚裾部は外面に横方向のヘラミガキ調整、内面にナデ調整、脚柱部は外面に縦方向のヘラケズリ調整、内面にナデ調整を施し、上半にシボリ痕が残る。杯底部内面にはラセン状暗文を施す。38 は脚裾部は外面は表面劣化のため調整不明であるが、内面にナデ調整、脚柱部は外面に縦方向のヘラケズリ調整、内面にナデ調整、杯部は内外面ともに表面劣化のため調整不明な部分が多いが、外面下半には縦方向のハケメ調整を施す。胎土には直径 1cm 程度の礫を含む。

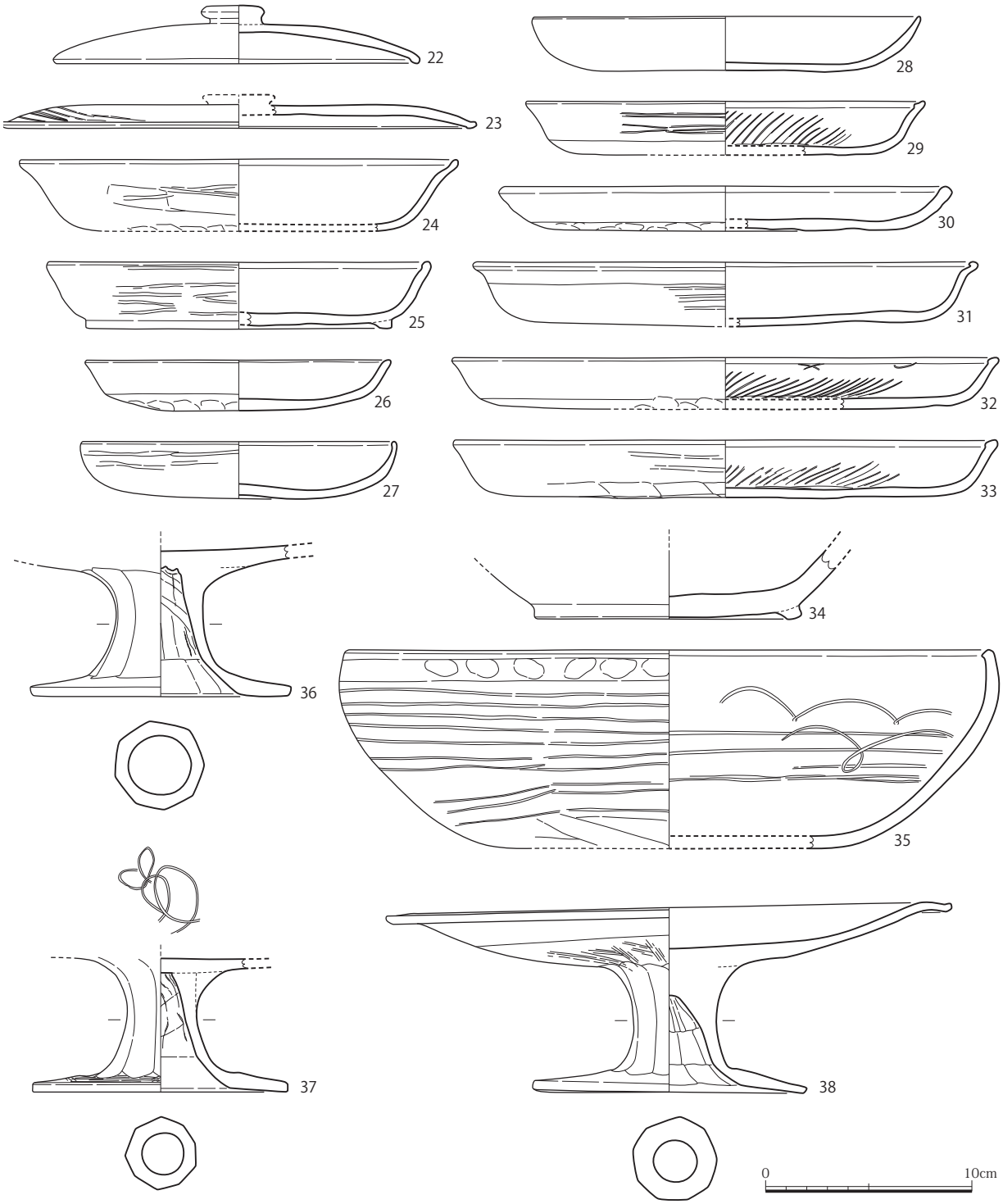


図 16 SK030 黒褐色土出土遺物実測図（1）（S=1/3）

土師器盤（39） 外面に横方向の粗いヘラミガキ調整、内面にナデ調整を施し、口縁端部にはヨコナデ調整を加える。口縁端部よりやや下がった位置に把手を貼り付け、把手周辺にはユビオサエ痕が残る。

土師器壺（40） 弱い平底を持ち、体部は上から 1/3 程度に肩をもつやや扁平な形態である。最大径付近には把手が相対して 2 カ所付くものと考えられる。口縁部は短く外反し、口縁端部は外方へ僅かに肥厚する。外底面に一方向のヘラミガキ調整、体部外面に横方向のヘラミガキ調整、体部内面にナデ調

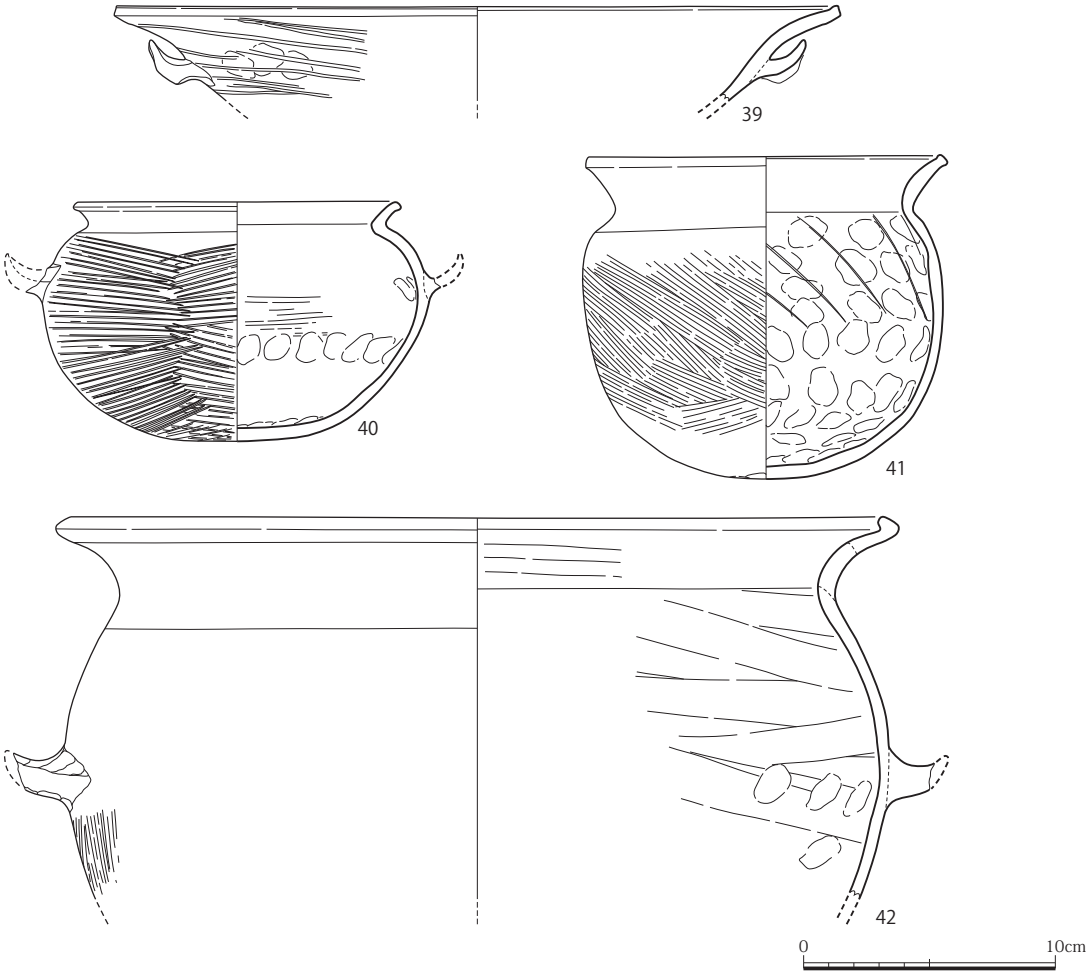


図 17 SK030 黒褐色土出土遺物実測図（2）（S=1/3）

整、口縁部にヨコナデ調整を施す。体部内面の底部付近、及び最大径よりやや下がった位置にユビオサエ痕が残る。体部外面には煤が付着する。

土師器甕（41・42） 41 は丸底を呈し、体部は外面に斜め方向のハケメ調整、内面にナデ調整を施し、内面には全体的にユビオサエ痕、上半に斜め方向の工具痕が残る。口縁部はヨコナデ調整し、口縁端部は外上方へ面を持ち、内外方へ弱く肥厚する。外面には黒斑が残る。体部内面には煤が付着する。42 は体部外面上半は表面劣化のため調整不明であるが、下半には縦方向のハケメ調整、内面に横方向のナデ調整を施し、外面最大径付近に把手を貼り付け、内面にはユビオサエ痕が残る。口縁部は内面に横方向のハケメ調整後ヨコナデ調整を施す。口縁端部付近には被熱痕がみられる。

須恵器蓋（43 ～ 47） 43 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面に扁平な宝珠状のツマミを貼り付ける。外面には降灰がみられる。44 は内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。天井部外面にはボタン状のツマミを貼り付ける。内面は平滑になっており、硯に転用された可能性がある。45 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面にはボタン状のツマミを貼り付ける。46 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、天井部外面中位に回転ヘラケズリ調整を施す。天井部外面には扁平な宝珠状のツマミを貼り付ける。天井部外面には降灰、口縁端部には重ね焼き痕がみられる。47 は内外面ともに回転ナデ調整後、外面頂部付近に回転ヘラケズリ調整を施す。天井部外面

には扁平な宝珠状のツマミを貼り付ける。内面は平滑となっており、硯に転用された可能性がある。外面口縁部付近には重ね焼き痕がみられる。

須恵器杯（48 ～ 61） 48 ～ 54 は杯 A である。48 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後、部分的な手持ちヘラケズリ調整を施す。49 ～ 51 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後ナデ調整をする。52 は口縁部外面に横位の「坏」の墨書がある。53 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後無調整である。口縁端部付近には重ね焼き痕がみられる。54 は内外面ともに回転ナデ調整、底部はヘラキリ後回転ヘラケズリ調整を施す。外面には火襷痕が残る。胎土はやや粗く、東海産の可能性が考えられる。55 ～ 60 は杯 B である。55 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後ナデ調整を施す。底部外面には高台を貼り付ける。56 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後無調整である。底部外面には高台を貼り付ける。57 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後回転ヘラケズリ調整を施す。底部外面には高台を貼り付ける。高台内に墨書があるが、文字は不明である。58 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後回転ヘラケズリ調整を施す。底部外面には高台を貼り付ける。59 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、口縁部下半に回転ヘラケズリ調整を施す。底部はヘラキリ後無調整である。底部外面には高台を貼り付ける。60 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後無調整である。底部外面には高台を貼り付ける。口縁端部には細かい剥離痕が連続しており、使用時の痕跡と考えられる。61 は杯 L である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。体部下端には 2 条の沈線が廻る。底部外面には高台を貼り付け、高台内に回転ヘラケズリ調整を施す。高台内に墨書があるが、文字は不明である。

須恵器皿（62） 皿 B である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部はヘラキリ後回転ヘラケズリ調整を施し、部分的に手持ちヘラケズリ調整を加える。底部外面には高台を貼り付ける。底部外面中央部には墨書があるが、文字は不明である。胎土はやや粗く、東海産の可能性が考えられる。

須恵器椀（63） 椀 B である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には高台を貼り付ける。外面には自然釉がみられる。

須恵器鉢（64） 鉢 A である。外面に回転ナデ調整後、横方向のヘラミガキ調整、内面に回転ナデ調整を施す。外面には重ね焼き痕がみられる。

須恵器高杯（65・66） 65 は内外面ともに回転ナデ調整後、外面に回転ヘラケズリ調整、内面に不定方向のナデ調整を施す。口縁端部付近の内面には 1 条の凹線が廻る。内面には重ね焼き痕、工具痕がみられる。66 は内外面ともに回転ナデ調整後、杯部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。脚部には 3 方向に透かしを入れる。

須恵器盤（67・68） 67 は内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には高台を貼り付ける。全体ににぶい黄橙色を呈し、猿投産と考えられる。68 は内外面ともに回転ナデ調整後、横方向から斜め方向のナデ調整を施す。外面下半には斜め方向のヘラケズリ調整を施し、工具痕が残る。底部外面外縁付近には回転ヘラケズリを施す。内面及び底部外面にはユビオサエ痕が残る。

須恵器壺蓋（69 ～ 72） 69 は内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。天井部外面にはボタン状のツマミを貼り付ける。70 は内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。また、天井部外面には扁平な宝珠状のツマミを貼り付ける。天井部外面には重ね焼き痕と溶着痕、内面には自然釉がみられる。器形は歪む。71 は内外面ともに回転ナデ調整後、天井部外面に回転ヘラケズリ調整を施す。天井部外面にはボタン状のツマミを貼り付ける。外面には自

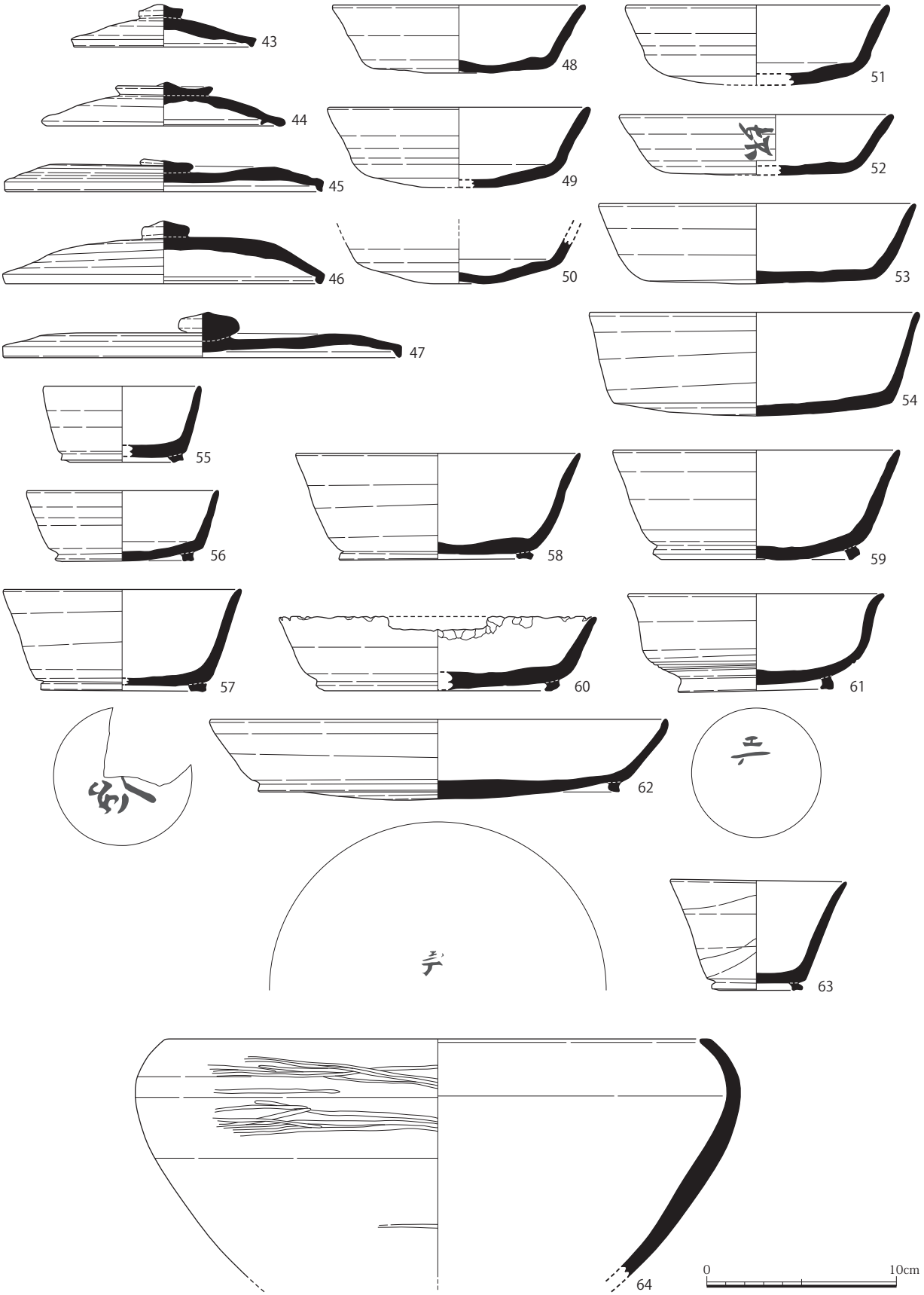


図 18 SK030 黒褐色土出土遺物実測図（3）（S=1/3）

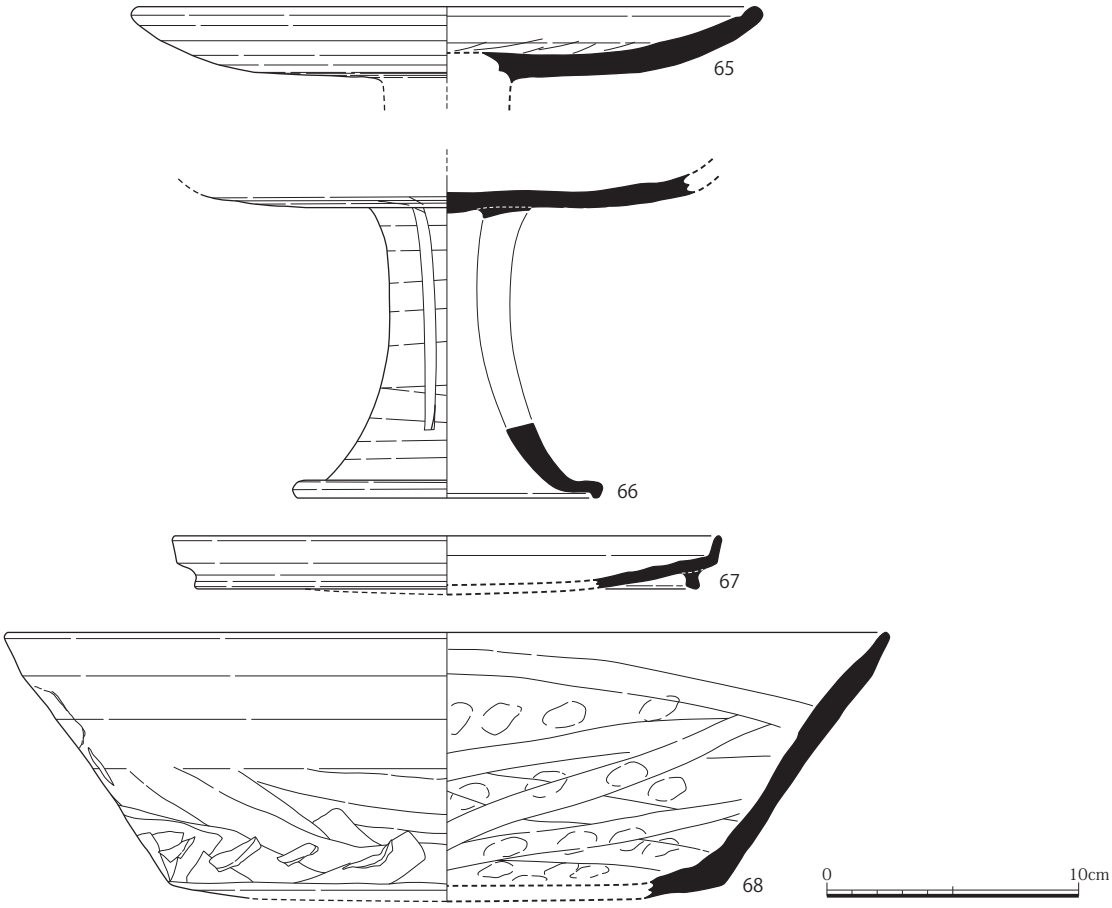


図 19 SK030 黒褐色土出土遺物実測図（4）（S=1/3）

然釉がみられる。72 は外面は表面劣化のため調整不明であるが、内面には回転ナデ調整を施す。天井部外面には扁平な宝珠状のツマミを貼り付ける。外面には自然釉がみられる。

須恵器壺（73 ～ 77） 73 は壺 E である。内外面ともに回転ナデ調整後、体部下半外面に回転ヘラケズリ調整を施す。底部外面には高台を貼り付ける。74 は壺 A である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部外面には高台を貼り付ける。口縁部及び体部外面下半に自然釉がみられる。75 ～ 77 は壺 K である。75 は内外面ともに回転ナデ調整後、体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施し、体部内面にはユビオサエ痕が残る。底部はヘラキリ後ナデ調整を施す。底部外面には高台を貼り付け、高台端部は内外に拡張し、外下方に面を持つ。口縁部中位及び肩部には浅い凹線が廻る。口縁部内面、体部上半、底部内面には降灰がみられる。76 は体部以下のみが完存する。内外面ともに回転ナデ調整後、体部外面下半に回転ヘラケズリ調整及び斜め方向のヘラケズリ調整を施す。体部底面には高台を貼り付ける。高台は外方に面を持ち、2 条の沈線が廻る。高台内にはユビオサエ痕が残る。77 は内外面ともに回転ナデ調整後、体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。底部外面には高台を貼り付け、高台端部は内外に拡張し、外下方に面を持つ。口縁部及び体部上半には降灰、自然釉がみられる。口縁部内面と底部内面には漆が付着し、体部の破面にも及ぶ。

須恵器甕（78） 甕 B である。体部は外面にタタキ調整が施され、内面には当て具痕がナデ調整により消される。口縁部は内外面ともに回転ナデ調整を施す。胎土には 5 ～ 10mm 程度の礫が多く含まれる。

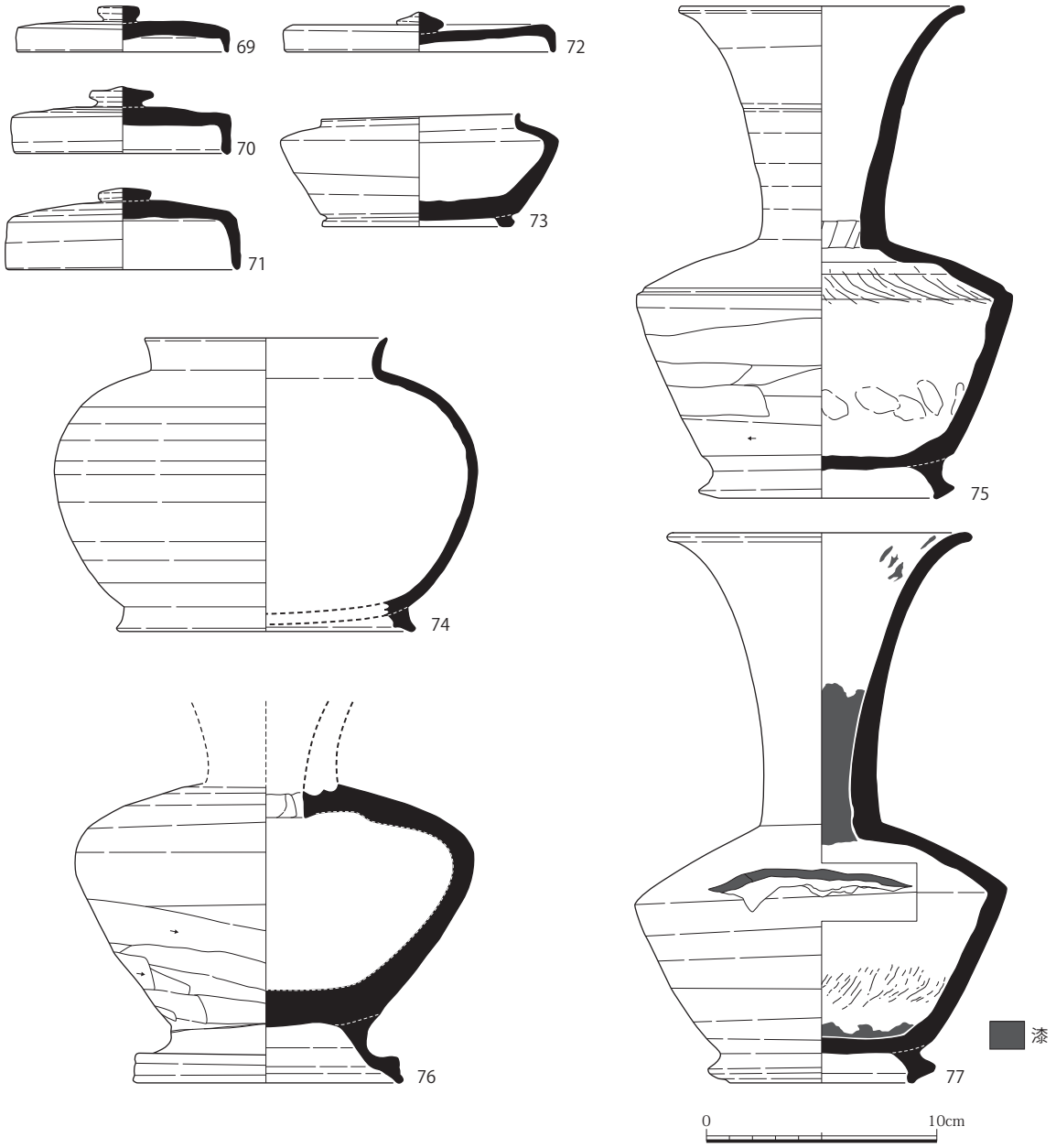


図 20 SK030 黒褐色土出土遺物実測図（5）（S=1/3）

土師器製塩土器（79） 内外面ともにナデ調整を施す。外面にはユビオサエ痕が残る。

不明石製品（80） 扁平な棒状の製品と考えられ、側面は面取りが施される。全体に擦痕がみられる。粘板岩製である。

【淡褐色土】

土師器皿（81） 皿Ａである。内外面ともに表面劣化のため調整不明であるが、底部外面にはユビオサエ痕が残る。

須恵器杯（82） 杯Ｂである。内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部はヘラキリ後ナデ調整を施す。底部には高台を貼り付ける。

須恵器壺（83） 壺Ｋである。内外面ともに回転ナデ調整後、体部外面下半に回転ヘラケズリ調整を施す。底部には高台を貼り付ける。内面には漆が付着しており、破面にも及ぶ。

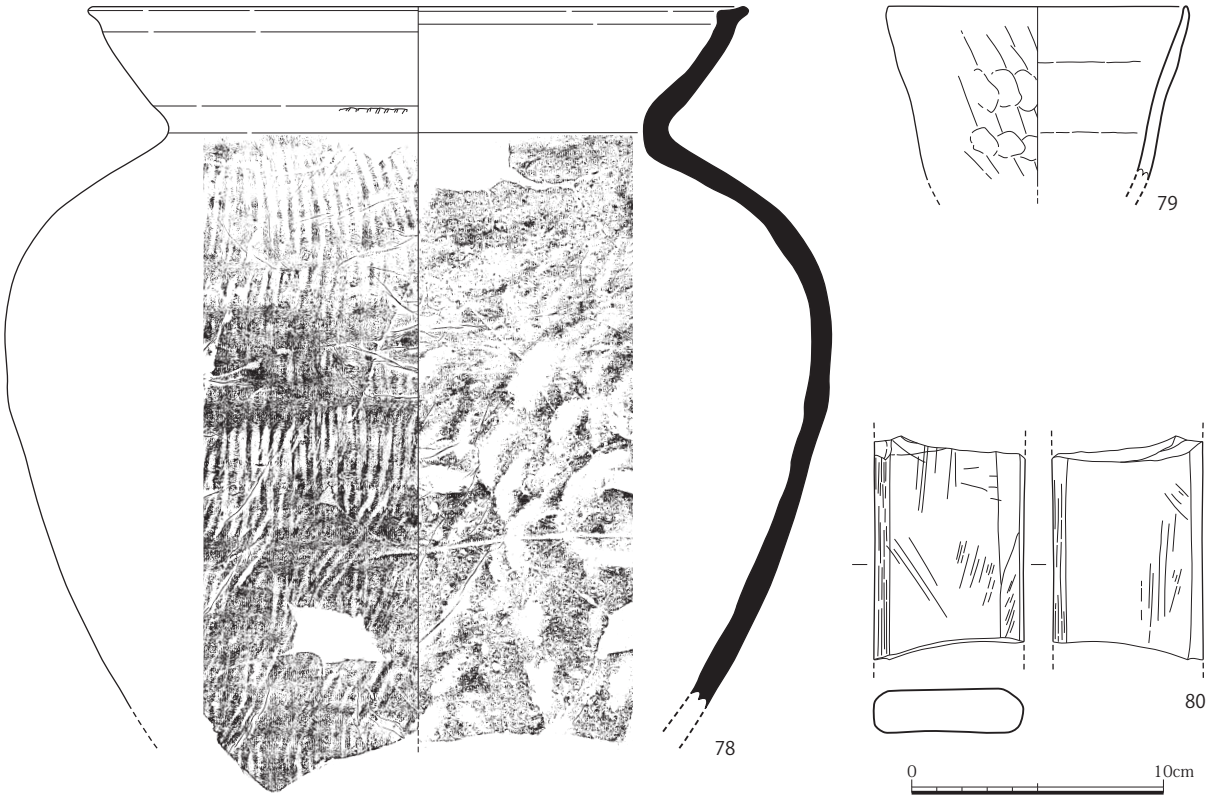


図 21 SK030 黒褐色土出土遺物実測図（6）（S=1/3）

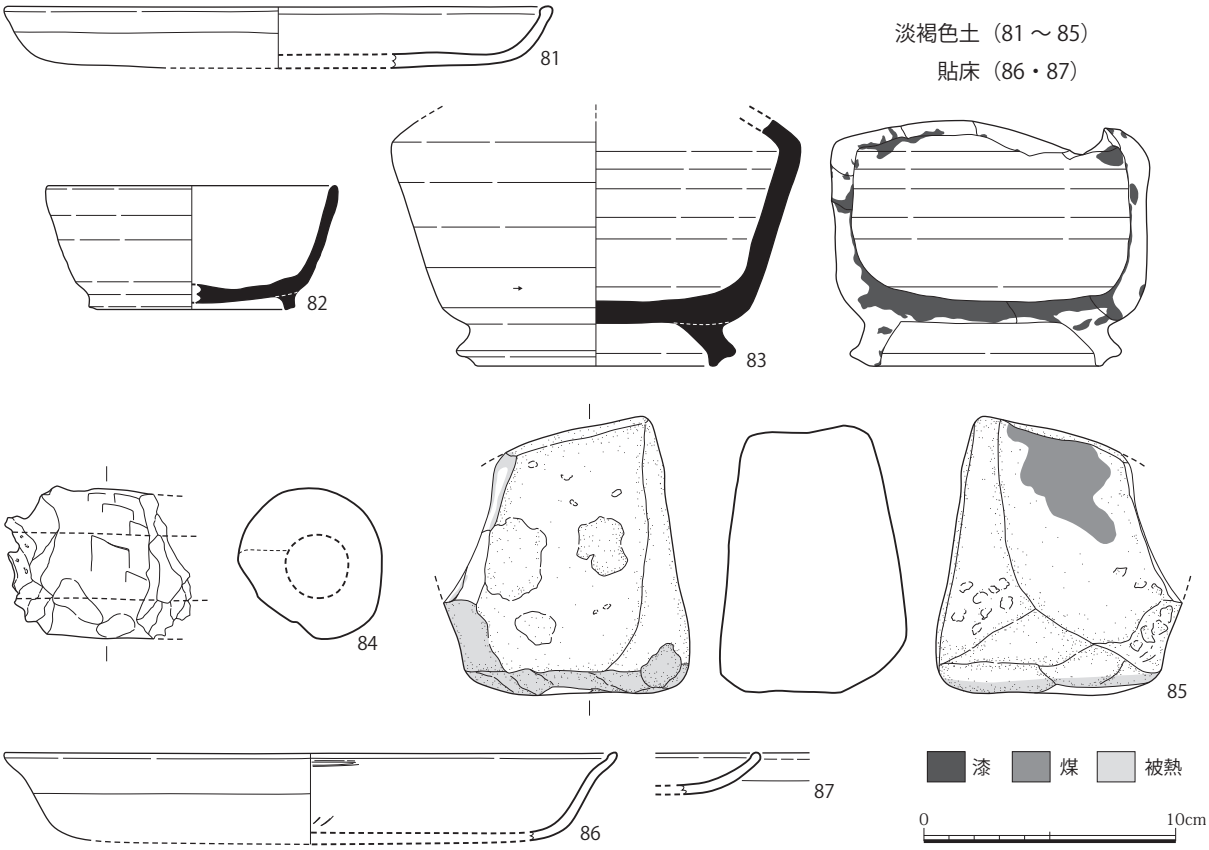


図 22 SK030 淡褐色土・貼床出土遺物実測図（S=1/3）

土製品鞴羽口（84）　内外面ともにナデ調整を施し、全体にユビオサエ痕が残る。先端部表面には高温にさらされたことに起因する発泡がみられる。

石製品支脚（85）　表面は被熱による赤化がみられる箇所が複数あり、表面が剥落している面もあり、煤の付着もみられる。使用時には用途に応じて下面とする面を変えていたものと考えられる。凝灰岩製である。

【貼床】

土師器杯（86）　杯Ａである。内外面ともに表面劣化のため調整不明であるが、体部外面下半にはヘラケズリ調整を施した可能性がある。

土師器皿（87）　皿Ａである。内外面ともに表面劣化のため調整不明であるが、口縁部にはヨコナデ調整を施したものと考えられる。

第４章　自然科学分析

第１節　樹種同定

（1）分析資料

平城京左京四条四坊九坪より出土した木製品３点（表１）について樹種同定を行った。

表１　樹種同定対象資料

報告遺構番号	遺構番号	資料名
SB090b（図５、図版５）	S-44	柱材
SA080f（図７、図版７）	S-43	柱材
SA080i（図７、図版11）	S-68	柱材

（2）分析方法と使用機器

1）同定方法

樹種同定に必要な横断面（木口面）、接線断面（板目面）、放射断面（柾目面）の３断面の切片を安全カミソリを用いて作製し、サフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n－ブチルアルコール等の有機溶剤に順次置換した。その後、非水溶性封入剤を用いて永久プレパラートを作製した。

2）使用機器

試料の観察には生物顕微鏡 Olympus BX-53 を、木材組織の顕微鏡写真撮影には顕微鏡デジタルカメラ Olympus DP-71 を使用した。

（3）同定結果

試料の木材組織は顕微鏡写真（図 23）の通りである。以下に樹種同定結果とその根拠となる木材組織の特徴について記す。樹木分類および植生分布は『原色日本植物図鑑木本編』（Ⅱ）に従った。

SB090b（S-44）

ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* Sieb. et Zucc. Endl.　（ヒノキ科 Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。樹脂細胞は晩材部、あるいは早材から晩材への移行部に点在または接線状に配列する。放射組織は単列で、２～７細胞高が見られる。分野壁孔はヒノキ型で、１分野に１～２個を確認できる。

植生分布：本州（福島県以南の主として太平洋側）、四国、九州（屋久島まで）。

樹　　形：常緑高木で直幹性。樹高 30m、胸高直径 1m に達する。

用　　途：建築、彫刻、家具、器具、船、漆器　等。

出土事例：建築部材、木簡、祭祀具（斎串・形代）、容器（折敷・曲物・桶・底板等）、武器（刀剣鞘）、紡織具（糸枠・糸巻）、服飾具（下駄）、食事具（箸）等。

SA080f（S-43）

ヒノキ亜科　Subfam. Cupressioideae　（ヒノキ科 Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。試料は乾燥による木材組織の収縮が顕著である。そのため木口面における樹脂細胞の分布が不明瞭だが、早材から晩材への移行部付近に点在することを確認した。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。放射組織は単列で、2 ～ 8 細胞高が見られる。分野壁孔はかろうじてヒノキ型が 1 分野に 1 個確認できる。ヒノキ亜科にはヒノキ属（ヒノキ・サワラ）、アスナロ属（アスナロ）などが含まれる。

植生分布：本州、四国、九州。

樹　　形：常緑高木。

用　　途：建築、彫刻、家具、器具、船、漆器　等。

SA080i（S-68）

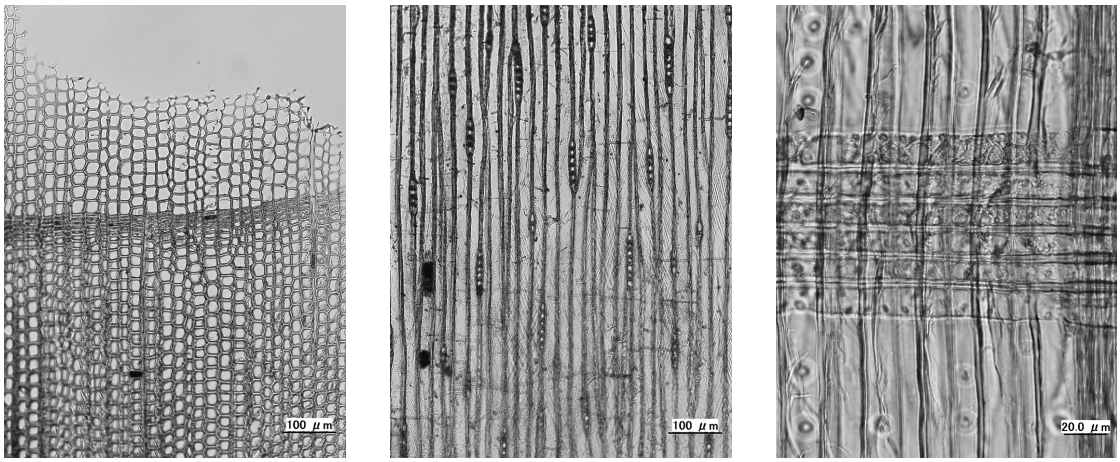
ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa Sieb*. et Zucc. Endl.　（ヒノキ科 Cupressaceae）

仮道管と放射柔細胞、樹脂細胞からなる針葉樹材。水平樹脂道および垂直樹脂道は無い。早材から晩材への移行は緩やかで、晩材幅は狭い。樹脂細胞は早材から晩材への移行部に点在する。放射組織は単列で 2 ～ 8 細胞高が見られる。分野壁孔はヒノキ型で、1 分野に 1 ～ 2 個を確認できる。

《参考文献》

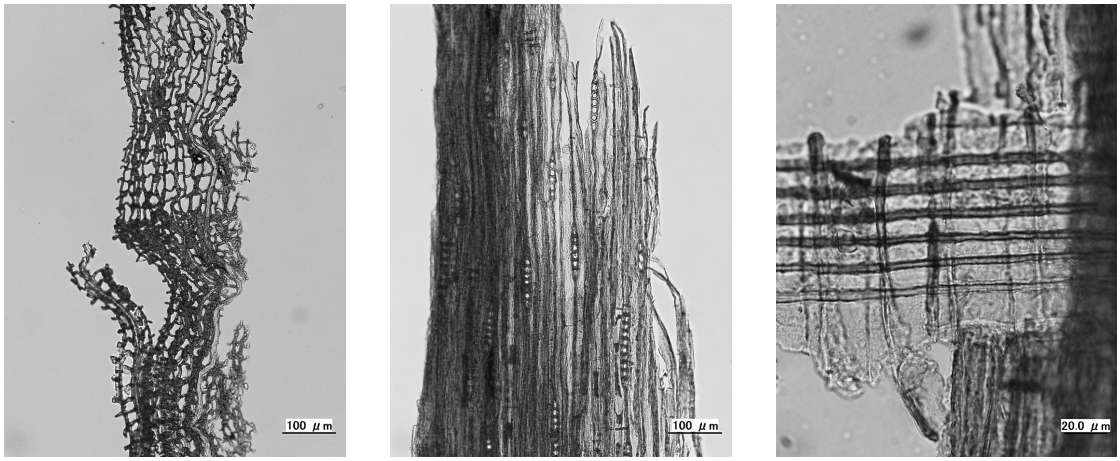
北村四郎・村田源 1979『原色日本植物図鑑・木本編』Ⅱ、保育社
島地謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社
林昭三 1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

SB090b（S-44）　　ヒノキ



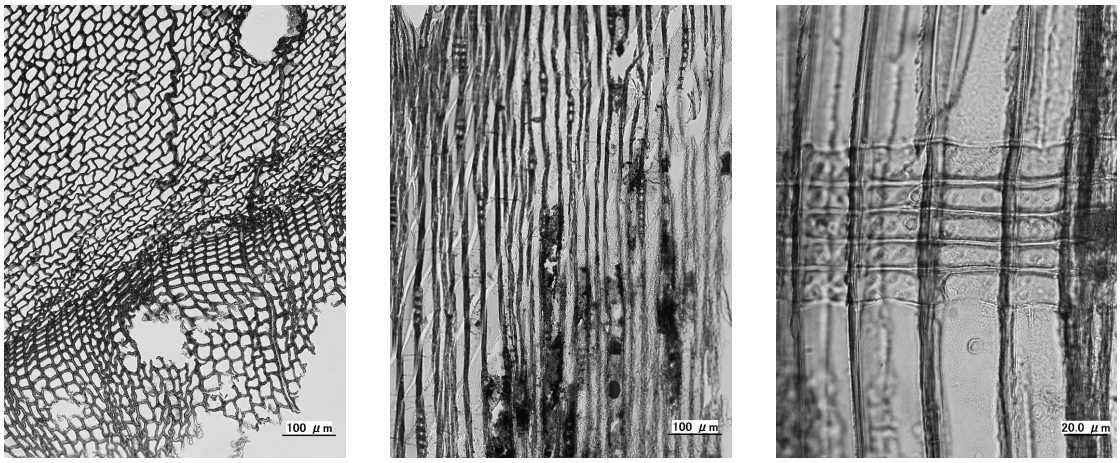
木口面　　板目面　　柾目面

SA080f（S-43）　　ヒノキ亜科



木口面　　板目面　　柾目面

SA080i（S-68）　　ヒノキ



木口面　　板目面　　柾目面

図 23 木材組織顕微鏡写真

第 5 章　調査のまとめ

第 1 節　条坊との関係

今回の調査区は左京四条四坊九坪の北東部に位置し、直接条坊関係遺構が検出される位置にはない。しかし調査区東端で検出した SK015 は調査区外に位置すると考えられる東四坊坊間東小路に並行して存在する遺構で、条坊道路との関係性が考えられる。そこで、まず東四坊坊間東小路（以下坊間東小路と記載）との関係について確認しておく。

坊間東小路は近隣では十六坪南端で行われた市 345 次調査、十五坪で行われた市 318・325・347 次調査でそれぞれ東側溝が検出されている（奈良市 1997）。ここで見つかった東側溝は幅 3 ～ 4m、深さ 0.2 ～ 0.3m を測り、小路の側溝としてはかなり幅が広く形状が不安定である。これに対し西側溝はこれまで近隣では検出例がなく、調査地周辺における坊間東小路の道路規模については不明である。因みに、北側、左京三条四坊十二坪で行われた調査（県 1986 年度調査：奈良県立橿原考古学研究所 1987）では今回の調査地よりもさらに東まで調査区を拡張しているが、ここでも西側溝が確認されていない。以上の点から、調査区周辺における坊間東小路は、不安定な東側溝のみが明らかになっている状況である。

こうした状況下で坊間東小路の規模を推定するために、東四坊坊間路からの距離を計算してみる。東四坊坊間路は今回の調査地と同じ九坪内で行われた奈文研 141-9 次調査で両側溝が検出されており、道路中心座標は X=-146,263.5、Y=-16,987.9（世界測地系）と確認されている（奈良国立文化財研究所 1983）。この数字から導かれる坊間東小路の推定道路心は X=-146,245、Y=-16,854.8 となる。この位置は判明している東側溝中心から約 6.4m 西に位置し、西に寄りすぎている感がある。しかし先述のように東側溝が不安定な形状であることを勘案すると、東側溝中心の位置推定は慎重にならざるを得ない。そこで今回の調査で検出した SK015 をもとに西側溝の位置を推定してみる。

平城京における小路の道路幅は一般に 20 大尺（約 7m）とされているので（井上 1984）、坊間東小路西側溝の推定位置は、推定道路中心から西に 3.5m の地点に求められる。この位置は今回調査地検出の SK015 中心から東に約 550cm の位置にあたる。

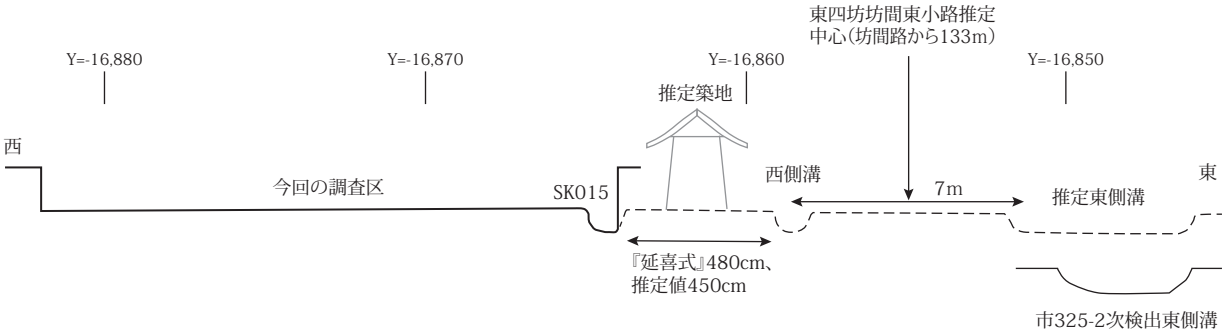
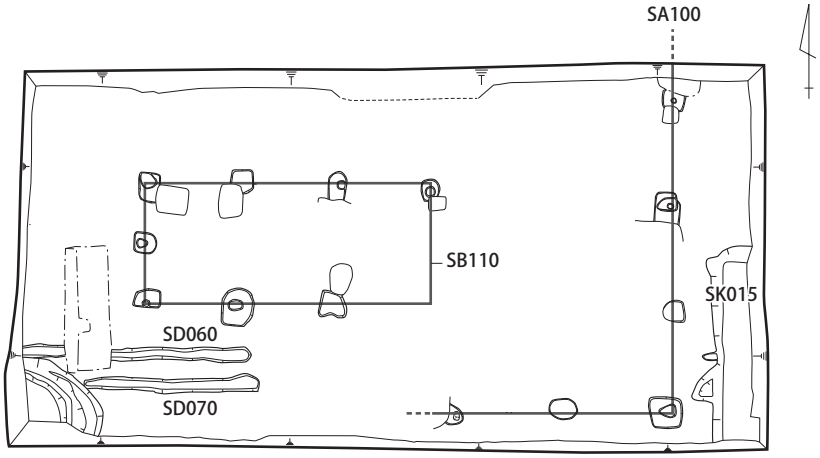
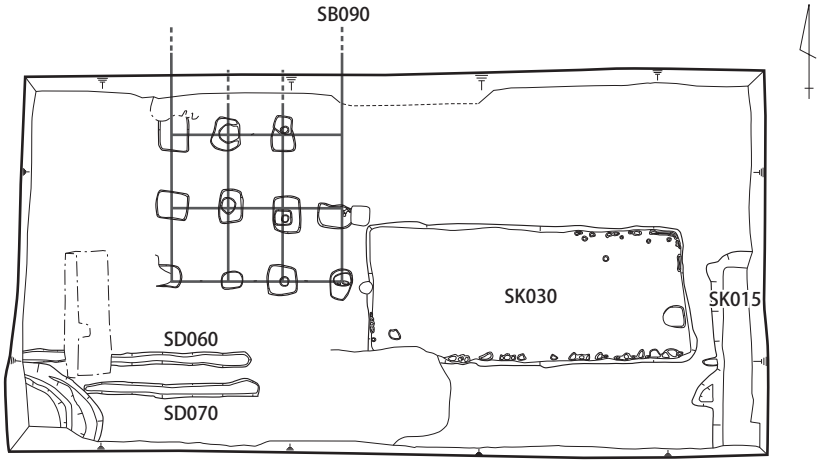


図 24 調査区と坊間東小路の推定断面模式図

Ⅰ期



Ⅱ期



Ⅲ期

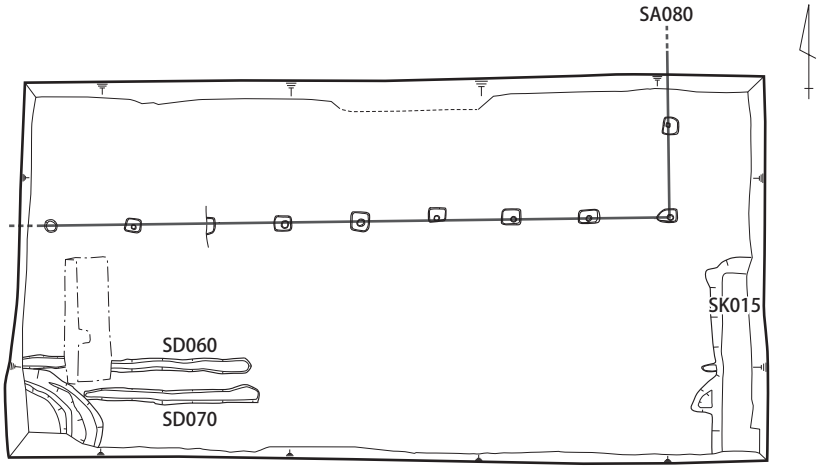


図 25 遺構変遷図

SK015 は底部が平坦な土坑で、先述のように南北方向を指向する溝状の形態を持つ。こうした形状の土坑は都城における築地内溝に見られることが多い。そこで、この土坑を築地内溝と仮定した場合、築地内溝中心から坊間東小路西側溝中心までの距離が 550cm ということになり、SK015 および東四坊坊間東小路西側溝の幅をそれぞれ幅 1m と仮定するとその内法間の距離は 450cm となる。『延喜式』では築地基底幅を６尺（約 180cm）、犬走を５尺（約 150cm）としているので、内法間の距離は 480cm となる。この数字は延喜式記載の理論値と近似する値となる。

屋上屋を重ねる推論ではあるが、これらの仮定を是とすると、築地内溝 SK015 中心から延喜式の規定通り東に 530cm の位置に西側溝を持ち、道路幅 7m の道を想定すると、その中心は坊間路から東にほぼ正確に一坊分の場所に合致することになり、道路位置、幅の推定に一定の妥当性を見出すことができるだろう。最終的には周辺における坊間東小路西側溝の検出に期待せざるを得ないが、今回の調査成果から導かれる仮説として提示しておく。

第２節　坪内の分割について

今回の調査では調査区を「L」字形に屈曲して東西に走る柱列 SA080 を検出した。調査地の北側、市 413 次調査（奈良市 1997）では三条大路北側溝が検出されており、これまでの調査で三条大路の規模がおおよそ 45 大尺（約 16m）と推定されているので（入倉 2007）、推定三条大路道路心（X=-146,193.5、Y=-146,201.5）から柱列 SA080 までの距離はおおよそ 41m、推定南側溝からの距離は 33m となる。これらは道路心間距離をもとにした坪内３分割（約 44m）、４分割（約 33m）とも、坪内内法の３分割（約 40.5m）、４分割（30.7m）のいずれとも異なる。利用の最終段階に坪内を細分化して別の宅地にしたとするよりも、大規模宅地の内部を区画した柱列と考えるべきかもしれない。

第３節　まとめ

前項の想定のもと、本調査区内での遺構の変遷を図 25 に示す。

Ⅰ期では坊間東小路に並行し、また宅地内を南北に分割する SA100 に囲まれた空間に SB110 が配される。SA100 の南北方向の柱列はさらに南へ続いていた可能性も考えられる。

Ⅱ期になるとこの区画が廃され、新たに工房施設と考えられる SK030 とその北西に近接する付属施設と考えられる SB090 が並立する。この段階では宅地内の区画施設は本調査区外の範囲に置かれたのであろう。

Ⅲ期になるとこの工房施設とその付属施設が廃され、新たに SA080 による区画が設けられる。SA080 の南北方向はⅠ期の SA100 と同様の位置を踏襲するが、その東西方向については北側へ移動している。SA080 の南北方向の柱については南へさらに伸びる可能性はない。東西方向についてはⅡ期の SK030 と重複せず北側を通っているので、SK030 がⅢ期まで存続していた可能性は否定できない。

これらの変遷は奈良時代中頃から後半のかけての比較的短期間のうちに行われている。位置として踏襲されているものは、SA100 と SA080 の南北方向の柱筋のみであり、宅地内の区画についての制約は緩いと考えられるものである。本調査区は、前項で考えたように大規模な宅地内の縁辺部近くに設けられた工房などを営む一画であったと考えられる。

《参考・引用文献》

井上和人 1984「古代都城制再考」『研究論集』Ⅶ　奈良国立文化財研究所
入倉徳裕 2007「平城京外京の条坊について」『平城京左京四条四坊・四条五坊』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第 101 冊
奈良市教育委員会 1997『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書－平成 8 年度－』
奈良県立橿原考古学研究所 1987『平城京左京三条四坊十二坪　発掘調査報告』奈良県文化財調査報告書第 52 集
奈良国立文化財研究所 1983『平城京左京四條四坊九坪発掘調査報告』

関連資料

図 26　検出遺構配置略図
表 2 ～ 4　報告遺物一覧（1）～（3）
表 5 ～ 7　検出遺構および出土遺物一覧（1）～（3）

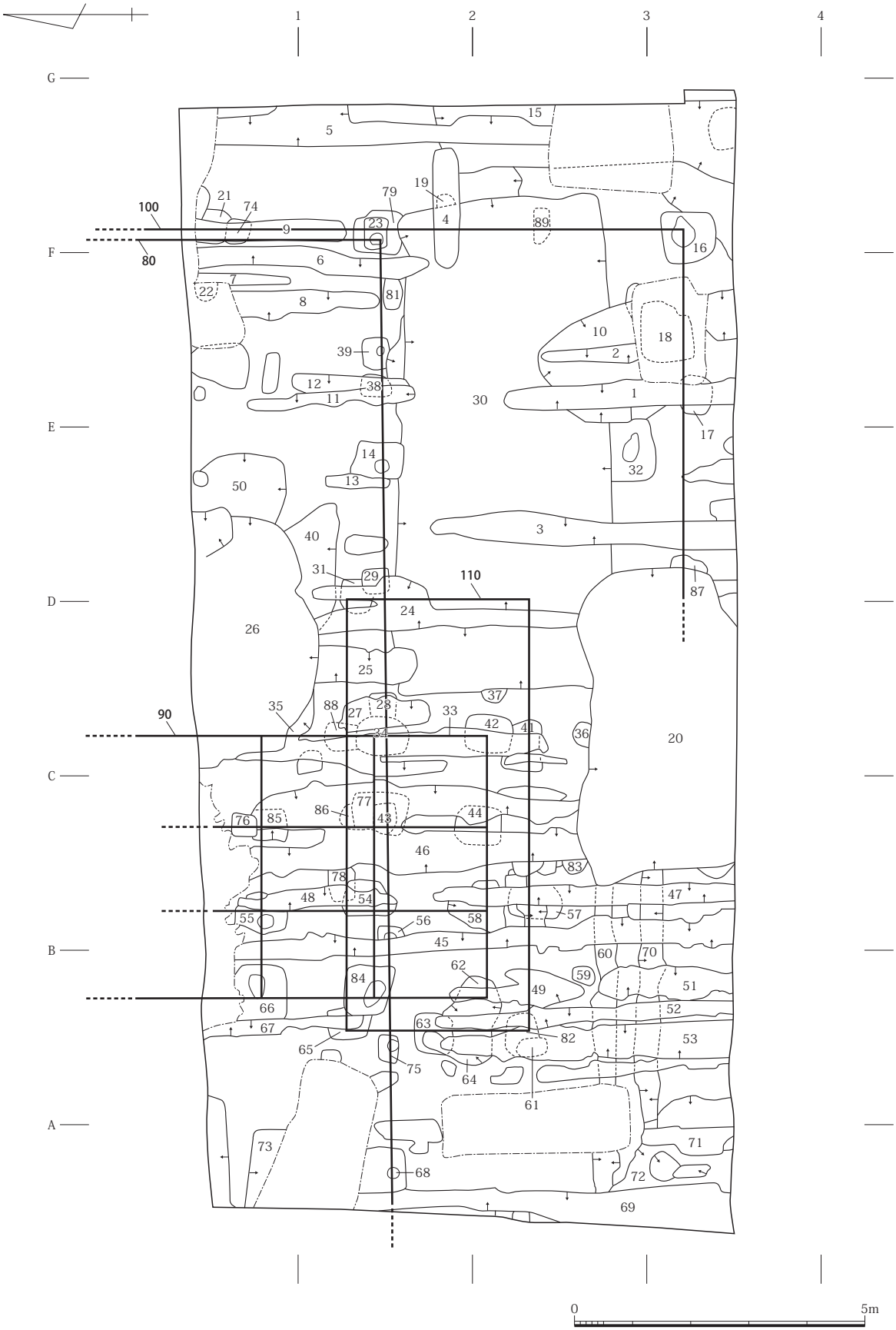


図 26 検出遺構配置略図（S=1/100）

表 2　報告遺物一覧（1）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径	器高	底径	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
1	図 12	図版 17	SB090d 掘方	土師器 杯	＊	（2.3）	＊		体部細片	やや粗 ～ 2mm 長石・長石・クサリ礫	良 橙 5YR7/6	杯 A
2	図 12		SB090k 掘方	土師器 杯	＊	（3.9）	＊		体部細片	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 5YR7/6	杯 A
3	図 12	図版 17	SB090b 抜取	土師器 杯	＊	（2.6）	＊		50%	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 2.5YR7/8	杯 E
4	図 12		SB090b 掘方	土師器 皿	＊	（2.0）	＊		体部細片	やや粗 ～ 1mm 長石・クサリ礫	良 橙 5YR7/8	
5	図 12		SB090a 抜取	土師器 皿	（21.3）	2.8	＊		25%	やや粗 ～ 1mm 雲母・石英・長石・クサリ礫	良 橙 5YR7/8	
6	図 12		SB090a 抜取	土師器 椀	＊	（4.2）	＊		体部細片	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 2.5YR7/8	椀 C
7	図 12	図版 17	SB090e 抜取	土師器 蓋	（46.0）	（5.8）	＊		10%	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 灰白 7.5YR8/2	
8	図 12		SB090b 掘方	須恵器 杯蓋	＊	1.6	＊		50%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒・雲母	良 灰白 N7/0	転用硯？
9	図 12	図版 17	SB090a 掘方	須恵器 杯	（18.2）	6.0	（12.4）		33%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰 N6/0	杯 B
10	図 12	図版 17	SB090d 掘方	須恵器 杯	（21.0）	6.1	（15.3）		33%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰 N6/0	杯 B
11	図 12	図版 17	SB090d 掘方	須恵器 杯	18.5	3.4	＊		90%	やや粗 ～ 2mm 長石・黒色粒・雲母	良 灰白 N8/0	杯 C 東海産？
12	図 12		SB090i 抜取	須恵器 高杯	＊	13.1	（14.5）		50%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	
13	図 12	図版 17	SB090a 抜取	須恵器 蓋	（11.0）	3.9	＊		50%	やや粗 ～ 2mm 長石・黒色泥粒	良 灰白 N7/0	
14	図 12	図版 18	SB090e 抜取	須恵器 蓋	＊	（2.8）	＊		25%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
15	図 13	図版 18	SA080c 抜取	須恵器 皿	（30.2）	3.9	（25.0）		33%	やや粗 ～ 3mm 長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	皿 B
16	図 13		SA100c 抜取	土師器 杯	（19.1）	3.0	＊		10%	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 浅黄橙 7.5YR8/3	杯 A
17	図 14		SD060	須恵器 蓋	（10.8）	（1.2）	＊		25%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	転用硯？
18	図 15		SK015 黒褐色土	土師器 蓋	＊	（1.3）	＊		口縁部細片	密 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 灰白 10YR8/2	
19	図 15	図版 18	SK015 黒褐色土	土師器 皿	（21.6）	2.6	＊		50%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 2.5YR6/6	皿 A
20	図 15	図版 18	SK015 灰褐色土	土師器 杯	（13.6）	3.0	（10.4）		40%	やや粗 ～ 1mm 長石・クサリ礫	不良 橙 5YR6/8	杯 B
21	図 15	図版 18	SK015 灰褐色土	木製品 付け木	（10.8）	1.4	1.0					先端部炭化 板目取り
22	図 16	図版 18	SK030 ㉝ 黒褐色土	土師器 蓋	17.5	2.8	＊		70%	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 にぶい橙 7.5YR7/3	
23	図 16	図版 18	SK030 ⑮ -1 黒褐色土	土師器 蓋	（22.5）	（1.2）	＊		20%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 橙 5YR6/8	
24	図 16		SK030 C 区 黒褐色土	土師器 杯	（20.8）	3.5	＊		20%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	良 橙 5YR6/6	杯 A
25	図 16	図版 18	SK030 ㊸ 黒褐色土	土師器 杯	（18.4）	3.0	＊		33%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 7.5YR6/8	杯 B
26	図 16	図版 19	SK030 ㊶ 黒褐色土	土師器 杯	14.6	2.5	＊		80%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 5YR6/8	杯 C
27	図 16	図版 19	SK030 B 区 黒褐色土	土師器 杯	15.0	2.8	＊		100%	粗 ～ 2mm 長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 5YR7/6	杯 E 漆付着
28	図 16	図版 19	SK030 ⑦ 黒褐色土	土師器 皿	（18.7）	2.6	＊		80%	粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫	やや不良 橙 5YR7/6	皿 A
29	図 16	図版 19	SK030 D 区 黒褐色土	土師器 皿	（19.4）	2.6	＊		10%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 5YR7/8	皿 A
30	図 16	図版 19	SK030 ㊷ 黒褐色土	土師器 皿	（21.2）	2.2	＊		33%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 5YR7/6	皿 A
31	図 16	図版 19	SK030 セクション	土師器 皿	（24.0）	3.1	＊		20%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 5YR7/8	皿 A
32	図 16	図版 20	SK030 C 区 黒褐色土	土師器 皿	（26.2）	2.5	＊		20%	やや粗 ～ 1mm 長石・微小砂粒	良 橙 5YR6/8	皿 A
33	図 16	図版 20	SK030 ④ 黒褐色土	土師器 皿	（26.2）	2.8	＊		40%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫	良 橙 5YR6/8	皿 A
34	図 16	図版 20	SK030 B 区 黒褐色土	土師器 鉢	＊	（3.3）	（12.6）		80% 底部	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 5YR7/6	鉢 C
35	図 16	図版 20	SK030 ㉕ 黒褐色土	土師器 鉢	（31.0）	9.6	＊		25%	やや粗 ～ 1mm 長石・クサリ礫	やや不良 橙 5YR6/8	

表 3　報告遺物一覧（2）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径	器高	底径	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
36	図 16	図版 20	SK030 D 区 黒褐色土	土師器 高杯	＊	-（7.3）	-（12.3）		70% 脚部	粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 5YR6/8	
37	図 16	図版 20	SK030 ⑰ 黒褐色土	土師器 高杯	＊	-（6.5）	-（12.2）		50%	密 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 7.5YR6/8	
38	図 16	図版 21	SK030 ㉓ 黒褐色土	土師器 高杯	（24.6）	- 9.2	- 13.2		80%	やや粗 ～ 7mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 5YR7/8	
39	図 17	図版 21	SK030 D 区 黒褐色土	土師器 盤	（28.6）	-（3.8）	- ＊		20%	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	良 橙 5YR6/8	
40	図 17	図版 21	SK030 ㉜ 黒褐色土	土師器 壺	（12.6）	- 9.5	- ＊		50%	やや粗 ～ 2mm 長石・クサリ礫	やや不良 橙 2.5YR6/8	
41	図 17	図版 21	SK030 ⑱ 黒褐色土	土師器 甕	14.0	- 12.7	- ＊		80%	粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫	不良 橙 2.5YR6/8	
42	図 17	図版 21	SK030 ⑮ -1 黒褐色土	土師器 甕	（32.0）	-（15.2）	- ＊		10%	粗 ～ 4mm 石英・長石・クサリ礫・チャート	不良 灰白 7.5YR8/2	
43	図 18	図版 22	SK030 セクション	須恵器 蓋	9.4	- 2.3	- ＊		100%	密 微小砂粒	良 灰 N6/0	
44	図 18	図版 22	SK030 D 区 黒褐色土	須恵器 蓋	12.5	- 2.3	- ＊		90%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	転用硯？
45	図 18		SK030 ⑥ 黒褐色土	須恵器 蓋	（16.5）	- 1.8	- ＊		40%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
46	図 18	図版 22	SK030 セクション	須恵器 蓋	16.6	- 3.3	- ＊		80%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	
47	図 18	図版 22	SK030 ㊱ 黒褐色土	須恵器 蓋	（21.0）	- 2.4	- ＊		60%	密 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	転用硯？
48	図 18	図版 22	SK030 ㊵ 黒褐色土	須恵器 杯	（13.1）	- 3.6	- ＊		80%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	杯 A
49	図 18	図版 22	SK030 C 区 黒褐色土	須恵器 杯	（13.6）	- 4.3	- ＊		50%	密 ～ 2mm 長石・クサリ礫・黒色粒	良 灰白 N8/0	杯 A
50	図 18		SK030 D 区 黒褐色土	須恵器 杯	＊	-（2.4）	-（2.4）		50% 底部	密 ～ 2mm 長石・クサリ礫	良 灰白 N8/0	杯 A
51	図 18	図版 22	SK030 C 区 黒褐色土	須恵器 杯	（13.5）	- 4.2	- ＊		30%	密 ～ 3mm 長石・微小砂粒	良 灰白 N8/0	杯 A
52	図 18	図版 22	SK030 ㊽ 黒褐色土	須恵器 杯	（14.2）	- 3.1	- ＊		20%	密 ～ 3mm 長石・微小砂粒	良 灰白 N8/0	杯 A 墨書「坏」
53	図 18	図版 23	SK030 ㉛ 黒褐色土	須恵器 杯	16.6	- 4.2	- ＊		90%	やや粗 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	不良 灰白 N8/0	杯 A
54	図 18	図版 23	SK030 ㉒ 黒褐色土	須恵器 杯	17.2	- 5.5	- ＊		70%	やや粗 ～ 2mm 長石	良 灰白 N8/0	杯 A 東海産？
55	図 18	図版 23	SK030 セクション	須恵器 杯	（8.2）	- 4.0	-（5.5）		50%	密 微小砂粒	良 灰白 N6/0	杯 B
56	図 18	図版 23	SK030 ⑬ 黒褐色土	須恵器 杯	（10.0）	- 3.7	- 7.2		50%	密 ～ 3mm 長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	杯 B
57	図 18	図版 23	SK030 ⑭ 黒褐色土	須恵器 杯	12.4	- 5.4	- 8.6		70%	密 ～ 2mm 長石・黒色泥流	良 灰白 N8/0	杯 B 墨書「？」
58	図 18	図版 23	SK030 ㊷ 黒褐色土	須恵器 杯	14.9	- 5.6	- ＊		50%	密 ～ 2mm 長石・黒色粒	良 灰白 7/0	杯 B
59	図 18		SK030 ㉘ 黒褐色土	須恵器 杯	（15.1）	- 5.8	-（10.1）		50%	密 ～ 3mm 長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	杯 B
60	図 18	図版 24	SK030 ⑬ 黒褐色土	須恵器 杯	（16.6）	- 3.9	-（12.0）		40%	やや粗 ～ 3mm 長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	杯 B
61	図 18	図版 23	SK030 A 区 黒褐色土	須恵器 杯	13.4	- 5.2	- 8.1		100%	密 ～ 4mm 長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	杯 L 墨書「？」
62	図 18	図版 24	SK030 A 区 黒褐色土	須恵器 皿	24.0	- 4.3	- 19.0		70%	密 ～ 3mm 長石・微小砂粒	良 灰白 N8/0	皿 B 東海産？ 墨書「？」
63	図 18	図版 24	SK030 B 区 黒褐色土	須恵器 椀	9.2	- 5.9	- ＊		50%	密 ～ 1mm 長石・微小砂粒	良 灰白 N7/0	椀 B
64	図 18	図版 24	SK030 D 区 黒褐色土	須恵器 鉢	（28.7）	-（12.6）	- ＊		20%	密 ～ 4mm 長石・黒色泥粒	良 灰白 N7/0	鉢 A
65	図 19	図版 24	SK030 A 区 黒褐色土	須恵器 高杯	（24.2）	-（2.9）	- ＊		33% 杯部	密 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
66	図 19		SK030 ⑪ 黒褐色土	須恵器 高杯	＊	-（12.9）	- 11.8		100% 脚部	密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	
67	図 19	図版 25	SK030 C 区 黒褐色土	須恵器 盤	（21.4）	- 2.2	-（19.8）		10%	やや粗 ～ 2mm 長石・黒色泥粒	やや不良 にぶい黄橙10YR7/3	猿投産
68	図 19	図版 25	SK030 B 区 黒褐色土	須恵器 盤	（34.7）	- 10.5	- ＊		25%	密 ～ 3mm 長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	
69	図 20	図版 25	SK030 セクション	須恵器 壺蓋	9.2	- 2.0	- ＊		100%	密 ～ 2mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	

表 4　報告遺物一覧（3）

報告番号	挿図	写真図版	出土遺構層位	種別器種	口径	器高	底径	重	残存率	胎土・素材	焼成・色調	特記事項
70	図 20	図版 25	SK030 ⑫ 黒褐色土	須恵器 壺蓋	9.2	2.9	*		70%	やや粗 ～ 2mm 長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	
71	図 20	図版 25	SK030 ⑧ 黒褐色土	須恵器 壺蓋	10.0	3.5	*		80%	密 ～ 1mm 長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	
72	図 20	図版 25	SK030 ⑨ 黒褐色土	須恵器 壺蓋	11.6	1.7	*		100%	密 ～ 2mm 長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	
73	図 20	図版 26	SK030 A 区 黒褐色土	須恵器 壺	8.5	4.9	8.2		100%	密 ～ 2mm 長石・黒色泥粒	良 灰白 N8/0	壺 E
74	図 20	図版 26	SK030 ② 黒褐色土	須恵器 壺	(10.3)	12.7	(12.6)		25%	密 ～ 1mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N8/0	壺 A
75	図 20	図版 26	SK030 ⑲ 黒褐色土	須恵器 壺	(12.1)	21.3	9.5		80%	密 ～ 4mm 長石	良 灰 N6/0	壺 K
76	図 20	図版 26	SK030 ① 黒褐色土	須恵器 壺	*	(12.9)	11.5		100% 体・底部	やや粗 ～ 3mm 石英・長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	壺 K
77	図 20	図版 26	SK030 ②③ 黒褐色土	須恵器 壺	(12.8)	23.8	8.0		80%	やや粗 ～ 3mm 長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	壺 K 漆付着
78	図 21	図版 26	SK030 ㊹ 黒褐色土	須恵器 甕	(25.8)	(27.8)	*		30%	密 ～ 6mm 石英・長石・微小砂粒	良 灰 N5/0	甕 B
79	図 21	図版 27	SK030 D 区 黒褐色土	土師器 製塩土器	(11.9)	(6.9)	*		10%	粗 ～ 3mm 石英・長石・クサリ礫・雲母・チャート	不良 明赤褐 5YR5/6	
80	図 21	図版 27	SK030 ⑤ 黒褐色土	石製品 不明	(8.9)	6.0	1.8	163.5g		粘板岩		
81	図 22		SK030 B 区 淡褐色土	土師器 皿	(21.6)	2.5	*		25%	粗 ～ 2mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	不良 橙 5YR7/8	皿 A
82	図 22	図版 27	SK030 A 区 淡褐色土	須恵器 杯	(11.4)	4.9	(7.4)		50%	密 ～ 3mm 長石・黒色粒	良 灰白 N7/0	杯 B
83	図 22	図版 27	SK030 A 区 淡褐色土	須恵器 壺	*	9.7	(9.6)		40% 肩～底部	密 ～ 3mm 石英・長石	良 灰 N6/0	壺 K 漆付着
84	図 22	図版 27	SK030 B 区 淡褐色土	土製品 鞴羽口	(7.3)	6.1	5.7	159.2g		粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・黒色粒・雲母	良 橙 5YR6/6	
85	図 22	図版 27	SK030 A 区 淡褐色土	石製品 支脚	11.1	(9.8)	7.4	1140g		凝灰岩		
86	図 22		SK030 B 区 貼床	土師器 杯	(24.2)	(3.6)	*		10%	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・クサリ礫・雲母	良 橙 5YR6/6	杯 A
87	図 22		SK030 C 区 貼床	土師器 皿	*	1.6	*		口縁～底部 細片	やや粗 ～ 1mm 石英・長石・雲母	良 明赤褐 2.5YR5/8	皿 A

表 5　検出遺構および出土遺物一覧（1）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
1			素掘溝		土師器（古代）皿・杯・細片、土師器（中世～）釜、須恵器（古代）杯・壺・甕・蓋・細片、平瓦	F3・4
2			素掘溝		土師器（古代）杯・甕・高杯、須恵器（古代）壺・甕・蓋、製塩土器	F3
3			素掘溝		土師器（古代）椀・甕・高杯・蓋・細片、須恵器（古代）鉢・壺・甕・蓋・細片	E2 ～ 4
4			素掘溝		土師器（古代）杯・甕、須恵器（古代）壺・甕・蓋	F・G2
5			素掘溝		土師器（古代）高杯、須恵器（古代）杯・甕	G1 ～ 3
6			素掘溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯・蓋・細片	F・G1・2
7			素掘溝		土師器（古代）杯、須恵器（古代）甕	F1
8			素掘溝		土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）杯	F1・2
9			素掘溝		土師器（古代）細片、黒色土器Ｂ類椀	G1・2
10			土坑		土師器（古代）皿・杯・甕・細片、須恵器（古代）杯・甕・蓋・細片、平瓦	F3
11			素掘溝			F1・2
12			素掘溝		土師器（古代）甕、須恵器（古代）細片	F1・2
13			素掘溝		須恵器（古代）甕	E2
14	SA080c	抜取	ピット		土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）皿・杯・甕・細片	E2
15	SK015	黒褐色土	土坑		土師器（古代）皿・甕・蓋・細片、須恵器（古代）杯・壺・甕・蓋・細片、平瓦・丸瓦	G2・3
		灰褐色土			土師器（古代）皿・杯、須恵器（古代）蓋、付け木	
16	SA100a	抜取	ピット		土師器（古代）杯・甕・細片、須恵器（古代）杯	F・G4
17	SA100b	抜取	ピット		土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）細片	F4
18			土坑	攪乱	土師器（古代）細片	Ｆ３・4
19			ピット	19 → 30	土師器（古代）甕、須恵器（古代）杯	G2
20			土坑	近代 枝付木材を立てる	土師器（古代）杯・甕・細片、須恵器（古代）杯・壺・甕・細片、国産染付椀、国産陶器甕・擂鉢・土瓶、平瓦、不明木製品	C ～ E3・4
21	SA100d	抜取	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯	G1
22		抜取	ピット		須恵器（古代）杯	F1
23	SA080a	掘方	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕・細片	G2
		抜取			土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）蓋・細片	
24			素掘溝		土師器（古代）皿・杯・甕・蓋、須恵器（古代）杯・鉢・甕・高杯・蓋、平瓦、製塩土器	D・E2・3
25			素掘溝		土師器（古代）杯・甕・細片、須恵器（古代）甕	D2
26			井戸 （野井戸）	攪乱	土師器（古代）皿・甕、須恵器（古代）杯・壺・甕・蓋、国産染付椀	D・E1・2
27			素掘溝		須恵器（古代）甕・蓋	D2
28	SA080e	抜取	ピット		土師器（古代）椀・壺・甕・細片、須恵器（古代）杯	D2
29	SA080d	抜取	ピット		土師器（古代）杯・細片、須恵器（古代）杯・蓋	E2
30	SK030	黒褐色土	土坑		土師器（古代）皿・杯・鉢・甕・高杯・蓋、須恵器（古代）椀・皿・杯・鉢・壺・甕・高杯・蓋・平瓶、砥石、平瓦・不明瓦、製塩土器、燃えさし、焼土	D ～ G2・3
		淡褐色土			土師器（古代）皿・杯・高杯・細片、須恵器（古代）杯・壺・甕・細片、鞴羽口、焼石、炭化材	
		貼床			土師器（古代）皿・杯、須恵器（古代）杯、製塩土器	
		壁溝		付着土器は黒褐土と同一個体	須恵器（古代）壺	
31	SB110h	抜取	ピット		土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）皿・杯・蓋	E2
32		抜取	ピット			E3・4
33			素掘溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）壺・甕・蓋	D1 ～ 3
34	SB090i	抜取	ピット		土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）高杯・蓋・細片、焼土	D2
35			素掘溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯・甕・高杯、瓦器椀、平瓦	D1 ～ 3
36		抜取	ピット			D3
37		抜取	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯	D3
38		抜取	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）細片	F2
39	SA080b	抜取	ピット		土師器（古代）皿・杯・細片、須恵器（古代）甕	F2
40			土坑	中世（土採り穴？）	土師器（古代）皿・杯・甕・高杯・甑、須恵器（古代）皿・杯・甕・蓋、瓦器椀、片岩片、塼、付け木	D・E2

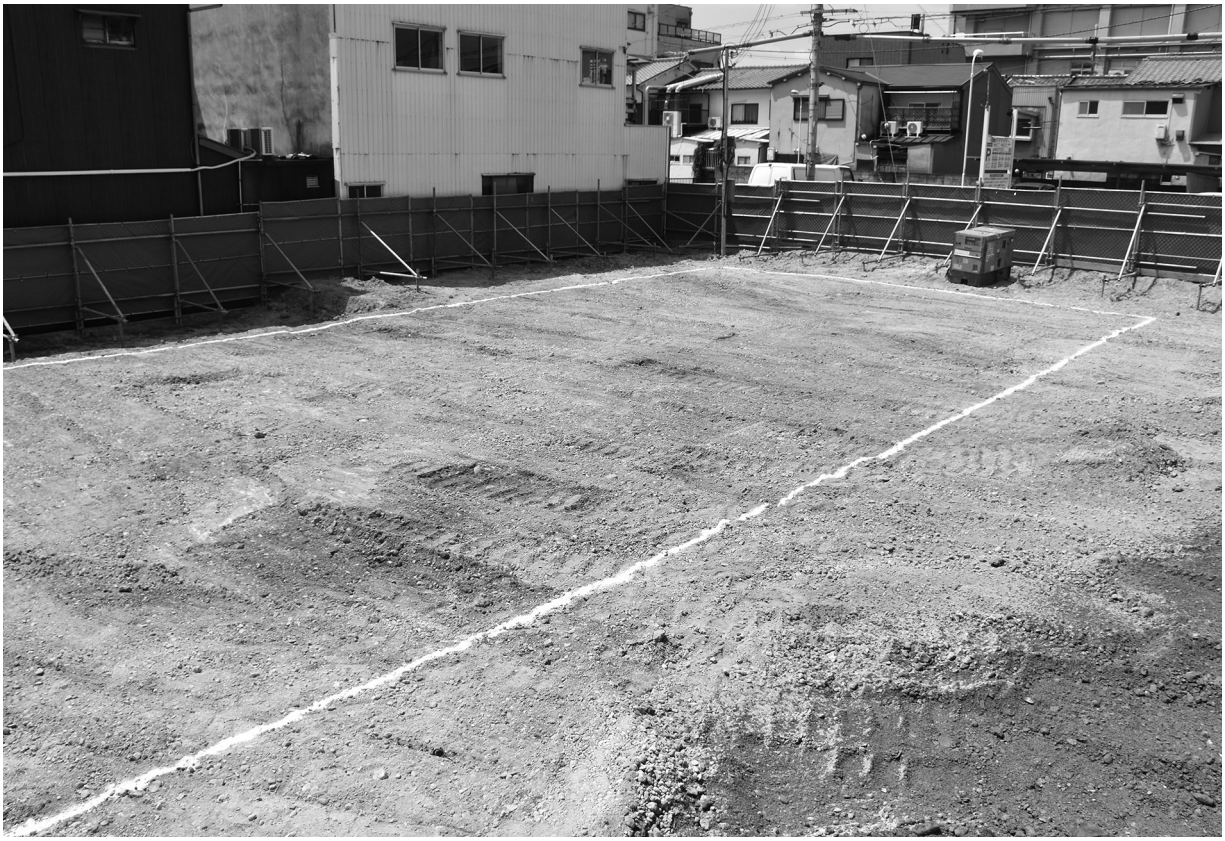
表 6　検出遺構および出土遺物一覧（2）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
41	SB110a	掘方	ピット		土師器（古代）甕、須恵器（古代）杯	D3
		抜取			須恵器（古代）甕	
42	SB090a	抜取	ピット		土師器（古代）椀・皿・甕、須恵器（古代）杯・壺・高杯・蓋	D2・3
43	SA080f	抜取	ピット		土師器（古代）杯・甕・細片、須恵器（古代）杯・壺	C2
44	SB090b	掘方	ピット		土師器（古代）杯・甕、須恵器（古代）杯・甕・蓋	C2・3
		抜取			土師器（古代）皿・杯・甕・高杯・細片、須恵器（古代）壺・蓋、製塩土器	
45			素掘溝		土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）杯・甕・蓋	B・C ライン
46			素掘溝		土師器（古代）杯、須恵器（古代）杯・甕	C1 ～ 3
47			素掘溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯・甕	C2 ～ 4
48			素掘溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）蓋	C1・2
49			素掘溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）壺・甕	B2・3
50			土坑	中世（土採り穴？）		E1
51			素掘溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕・細片	B3・4
52			素掘溝		土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）蓋	B2 ～ 4
53			素掘溝		土師器（古代）甕、須恵器（古代）杯・甕・蓋、平瓦	B2 ～ 4
54	SB090k	掘方	ピット		土師器（古代）杯・細片、須恵器（古代）細片	C2
		抜取			土師器（古代）皿・杯・細片、須恵器（古代）杯・細片	
55	SB090g	抜取	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕・蓋	C1
56	SA080g		ピット			C2
57	SB110b	抜取	ピット		土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）甕	C3・4
58	SB090c	掘方	ピット		土師器（古代）甕・細片、焼土	C2・3
		抜取			土師器（古代）杯・高杯・細片、須恵器（古代）甕・蓋・細片、製塩土器、焼土	
59		抜取	ピット		土師器（古代）高杯、須恵器（古代）細片、製塩土器	B3
60	SD060		溝		土師器（古代）甕・高杯・細片、須恵器（古代）蓋	A ～ C3
61			ピット		土師器（古代）細片	B3
62	SB090d	掘方	ピット		土師器（古代）杯・細片、須恵器（古代）皿・杯、焼土	B2・3
		抜取			土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯・甕・細片・焼土	
63	SB110d	抜取	ピット		土師器（古代）細片	B2
64		抜取	ピット		土師器（古代）皿・杯・甕・細片、須恵器（古代）杯・蓋・細片、焼土	B2・3
65	SB110e		ピット		土師器（古代）甕・細片、須恵器（古代）壺・蓋・細片	B2
66	SB090f	抜取	ピット		土師器（古代）杯・甕・細片、須恵器（古代）杯	B1
67			素掘溝		土師器（古代）細片	B1・2
68	SA080i	抜取	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯・細片、瓦加工品（土製品）	A2
69			素掘溝		土師器（古代）皿・甕・細片、須恵器（古代）杯・甕・蓋・細片	A2 ～ 4
70	SD070		溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯・壺・甕・細片	A ～ C3・4
71			素掘溝		土師器（古代）細片、須恵器（古代）壺	A4
72			土坑	奈良時代後半	土師器（古代）杯・甕・高杯、須恵器（古代）杯・壺・甕・蓋、点け木、焼土	A4
73			土坑	攪乱	土師器（古代）皿・杯・製塩土器、須恵器（古代）蓋	A1・2
74	SA080j	抜取	ピット		土師器（古代）細片	G1
75	SA080h		ピット			B2
76		抜取	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）細片	C1
77	SB090j	抜取	ピット		土師器（古代）細片	C2
78	SB110f		ピット			C2
79	SA100e		ピット			G2
80	SA080		柵	S-14・23・28・29・39・43・56・74・75・68		A ～ G1・2
81			ピット			F2
82	SB110c	抜取	ピット		土師器（古代）細片	B3
83		抜取	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）甕・細片	C3
84	SB090e	抜取	ピット		土師器（古代）杯・甕・蓋、須恵器（古代）甕・蓋、焼土	B2

表 7　検出遺構および出土遺物一覧（3）

S 番号	遺構番号	層位	種別	所見	出土遺物	地区
85	SB090h	抜取	ピット		土師器（古代）細片、須恵器（古代）杯・壺	C1
86			ピット			C2
87	SA100c	抜取	ピット		土師器（古代）杯・甕、須恵器（古代）甕	E4
88	SB110g		ピット			D2
89	SA100f	抜取	ピット		土師器（古代）細片	G3
90	SB090		建物	S-34・42・44・58・62・84・66・54・55・85・77		B ～ D1 ～ 3
91 ～ 99 は欠番						
100	SA100		柵	S-16・17・21・79・87・89		E ～ G1 ～ 4
101 ～ 109 は欠番						
110	SB110		建物	S-31・41・57・63・65・78・82・88		B ～ D2・3
		表土			土師器（古代）椀・皿・杯・高杯、須恵器（古代）杯・鉢・壺・甕・蓋、平瓦	

写真図版



調査前風景（北東から）

調査区東半遺構検出状況（北から）

図版 2

調査区東半全景（北から）

調査区西半全景（北東から）

東壁土層断面北端（西から）

南壁土層断面西端（北から）

図版 4

SB090・110 検出状況（西から）

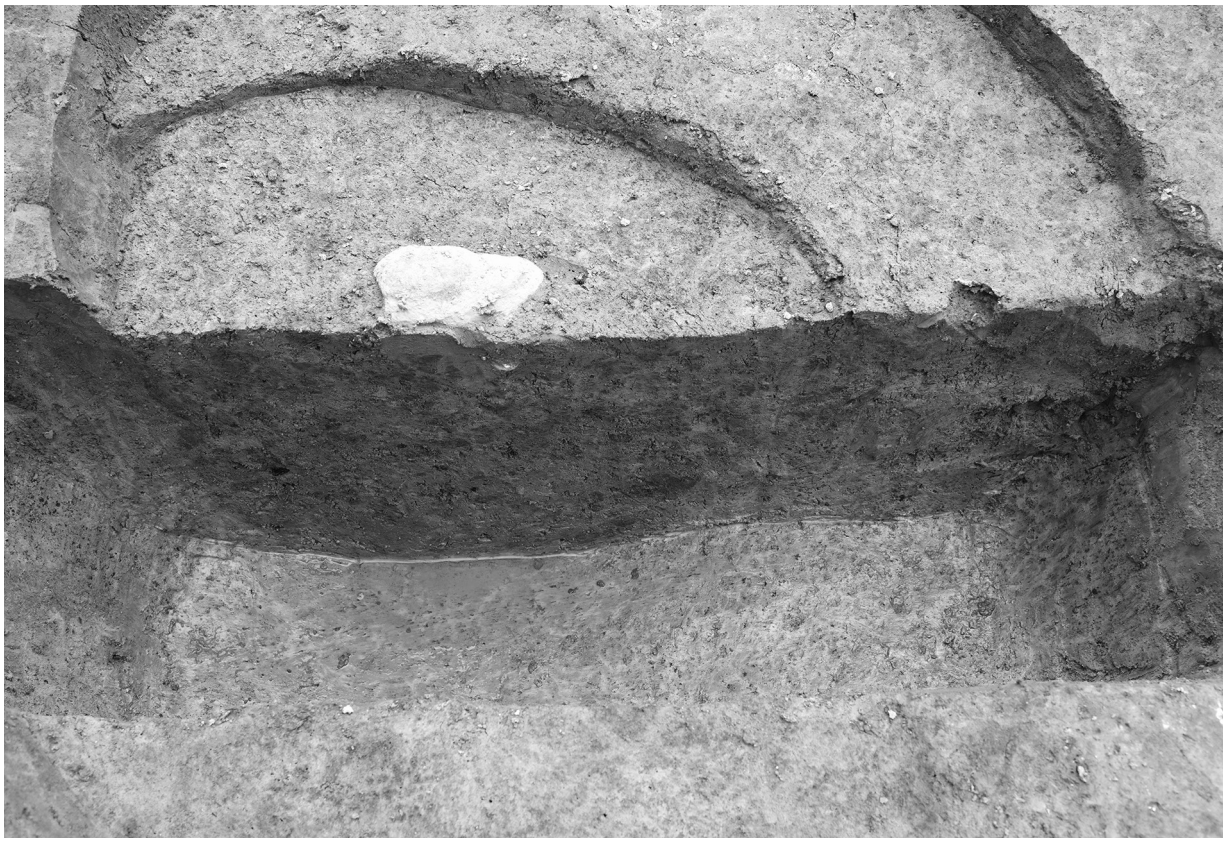
SB090a 土層断面（北から）

SB090b 土層断面（北から）

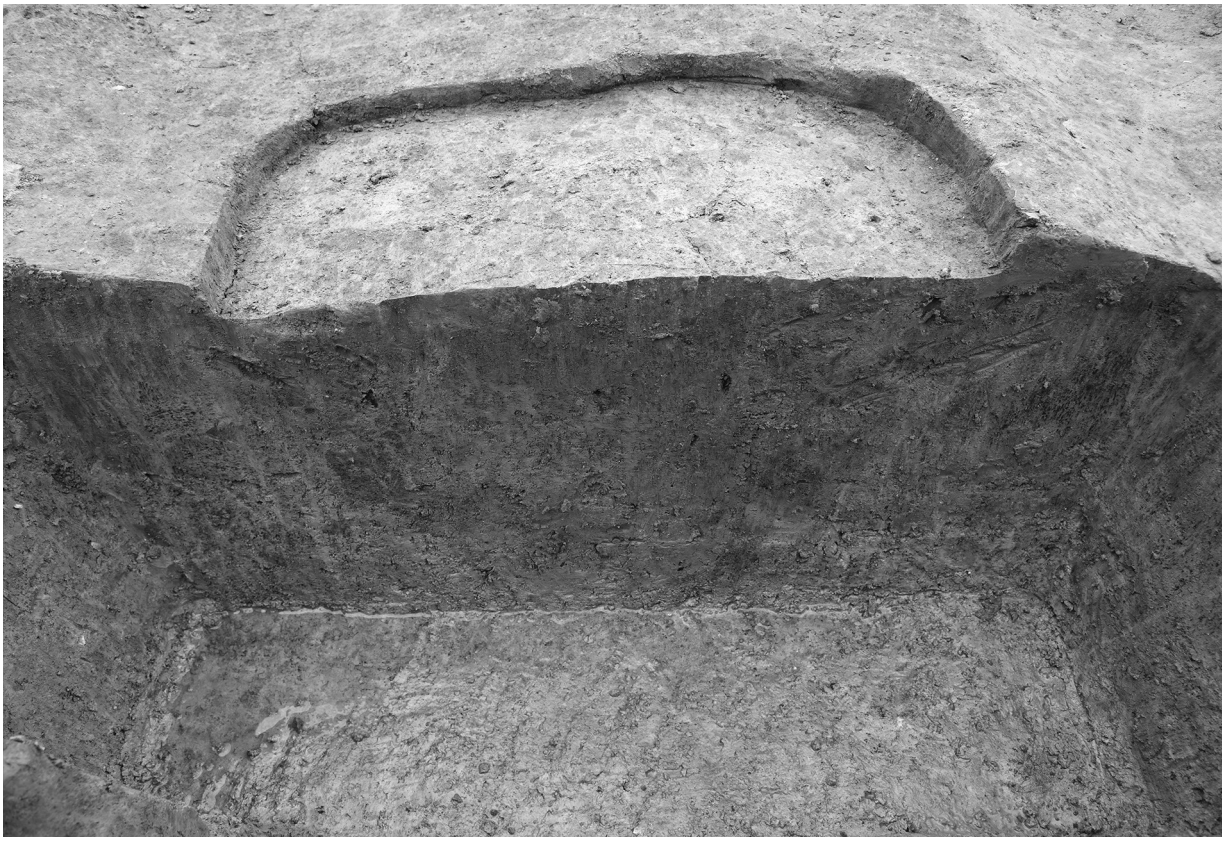
SB090d 土層断面（北から）

図版 6

SB090e 土層断面（北から）



SB090g 土層断面（北から）



SB090h 土層断面（北から）

SB090j・SA080f 土層断面（北から）

図版 8

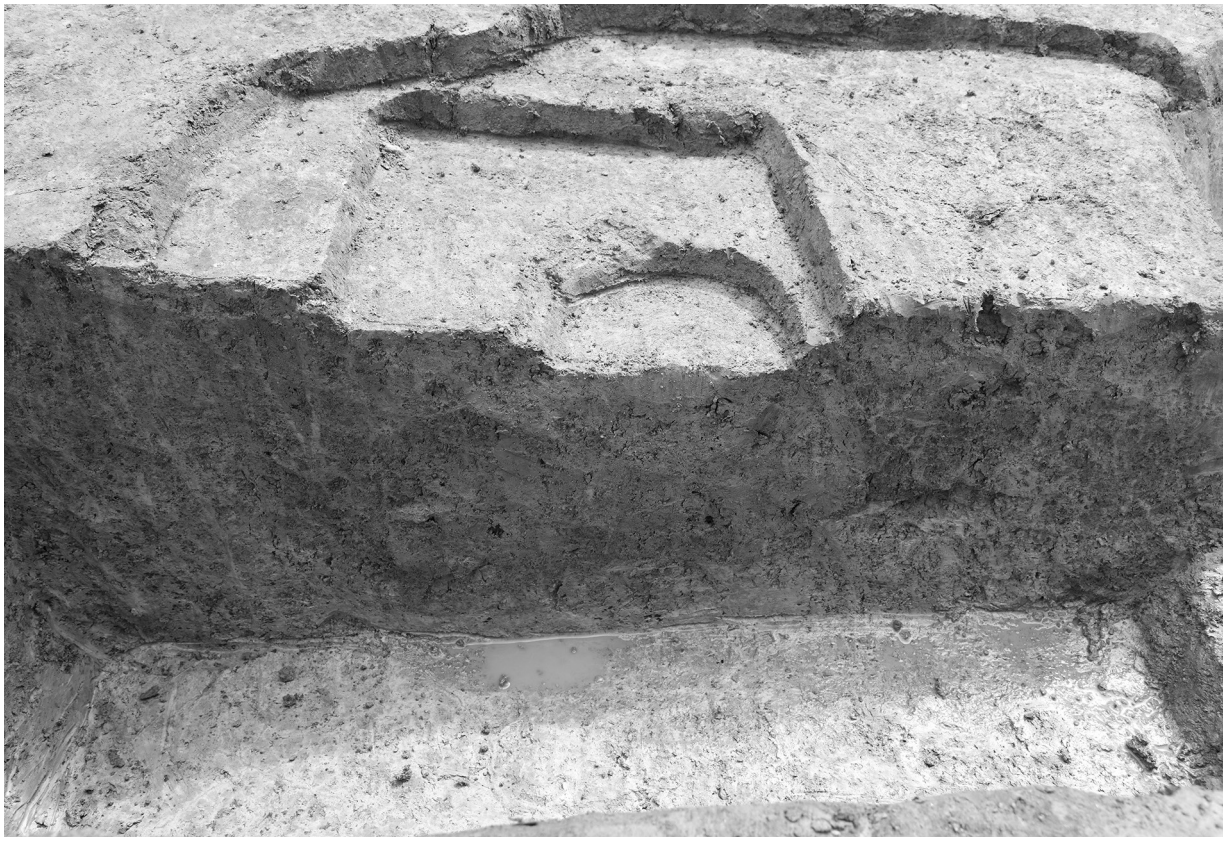
SB090k 土層断面（北から）

SB110b 土層断面（南から）

SB110h 土層断面（北から）

SA080d 土層断面（北から）

図版 10



SA080a 土層断面（西から）

SA080e 土層断面（北から）

SA080i 土層断面（南から）

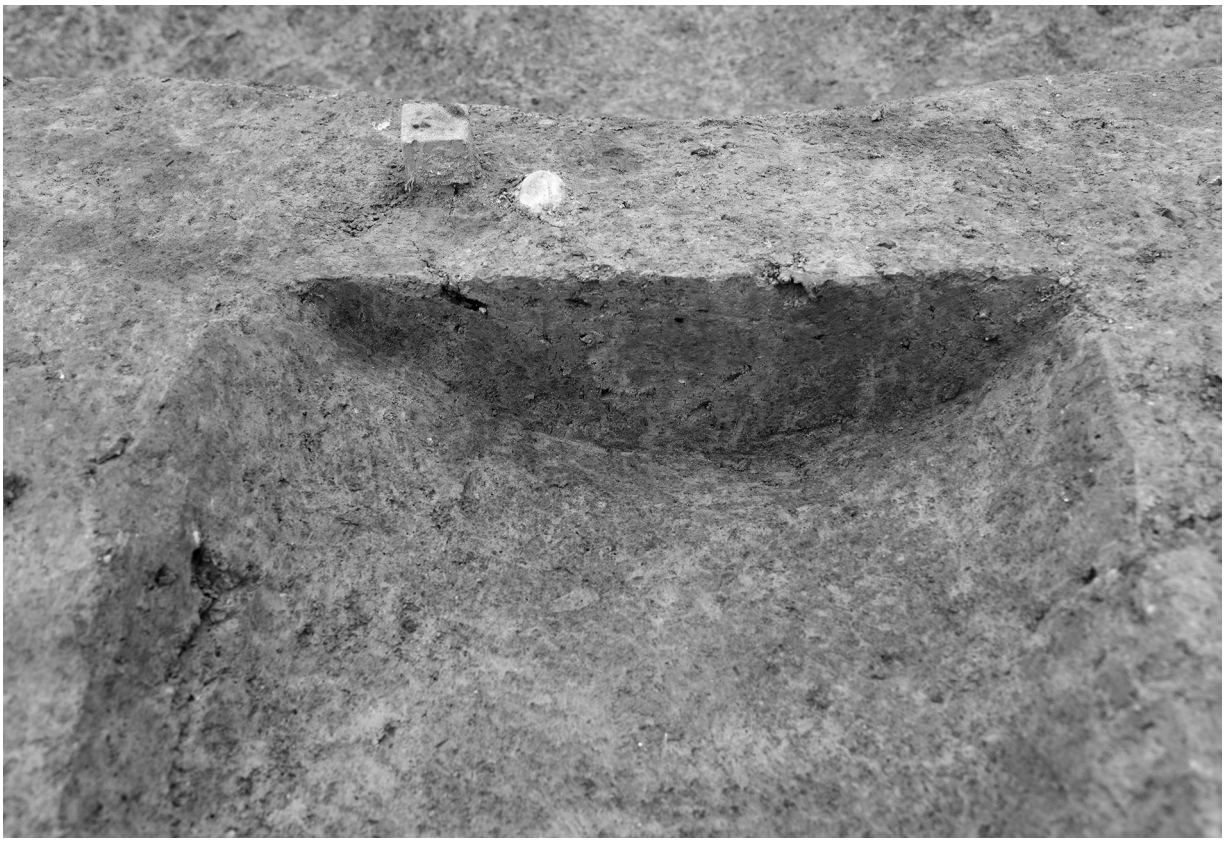
SA080j 土層断面（西から）

図版 12

SA100a 土層断面（北から）

SA100b 土層断面（北から）

SD060 土層断面（西から）



SD070 土層断面（西から）

SK015 土層断面（北から）

SK030 遺物出土状況（北西から）

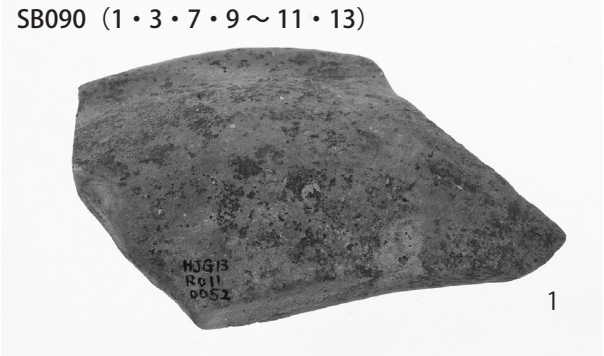
SK030 遺物出土状況（南東から）

SK030 土層断面 b-b' 東半（北から）

SK030 土層断面 b-b' 西半（北から）

SK030 完掘状況（東から）

SB090（1・3・7・9～11・13）



1

3

7

9

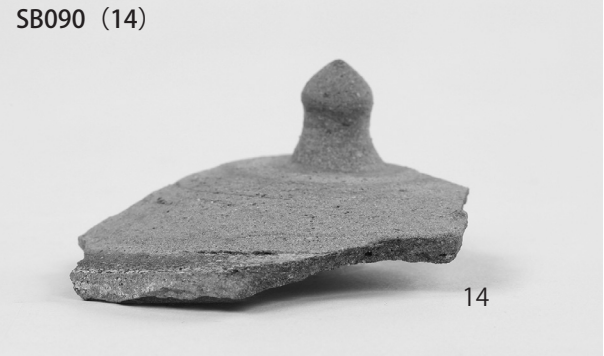
10

11

13

図版 18

SB090（14）



SK015（19～21）

SA080（15）

SK030（22・23・25）

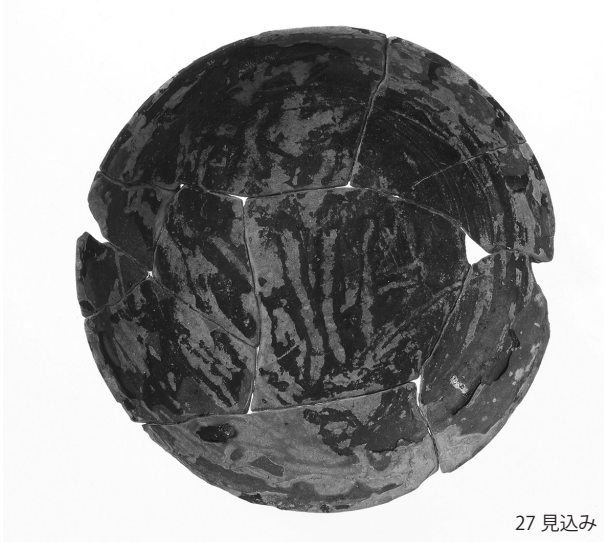
SK030（26 ～ 31）

26

28

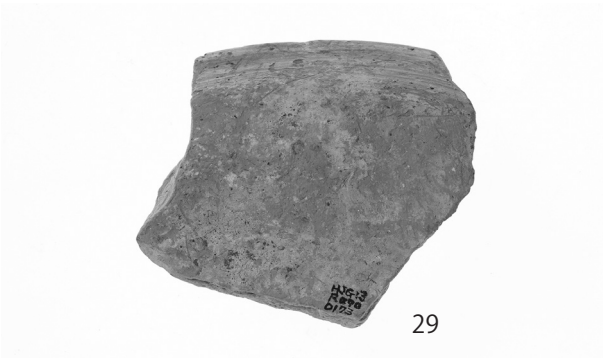
30

31


27 見込み

27

27 底面


29

SK030（32 ～ 37）

32

33

34

35

36

37

SK030（38 ～ 42）

SK030（43・44・46～49・51・52）

43

44

46

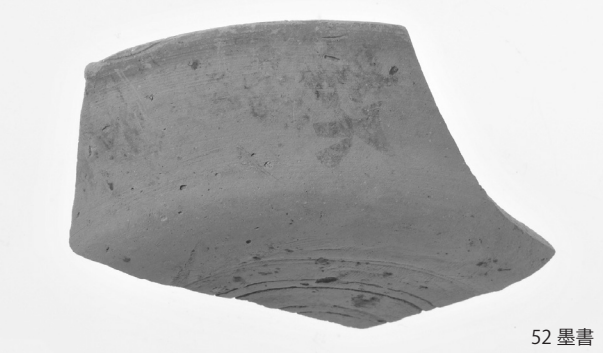
47

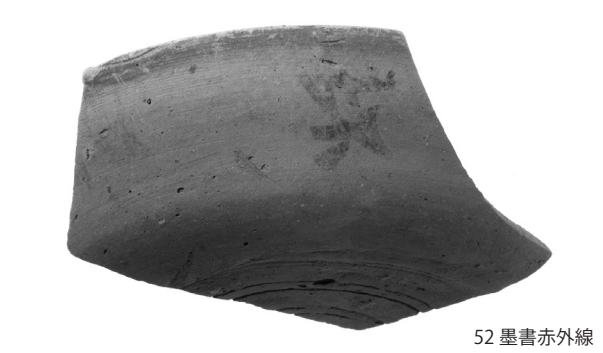
48

49

51

52


52 墨書


52 墨書赤外線

SK030（53 ～ 58・61）

53

57

54

57 墨書

55

61

56

61 墨書赤外線

58

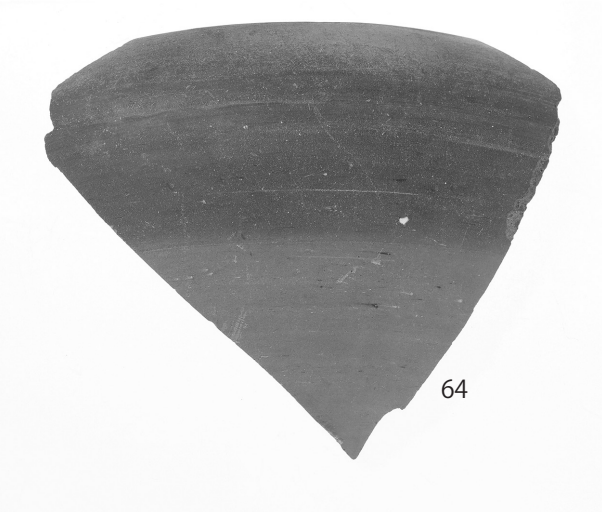
SK030（60・62 ～ 65）

60

62

63

62 墨書赤外線


64

65

SK030（67 ～ 72）

67

68

69

70

71

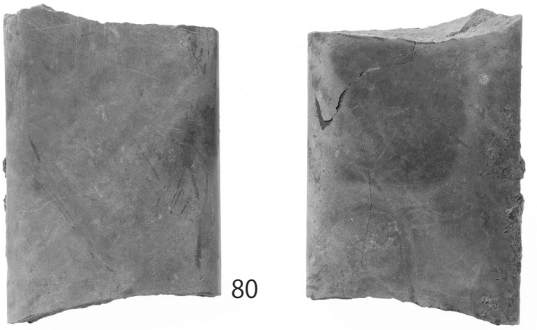
72

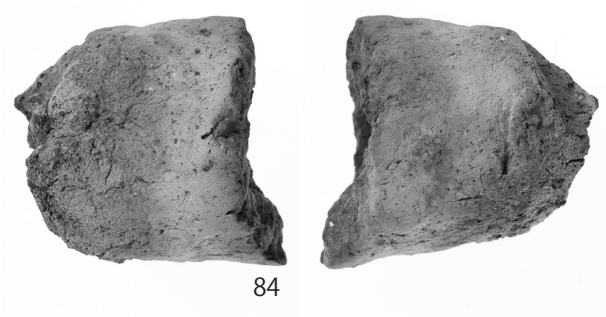
SK030（73 ～ 78）

SK030（79・80・82～85）

79

82


80


84

83

83 内面

85

報告書抄録

ふりがな	へいじょうきょうさきょうしじょうしぼうくつぼ	
書　　名	平城京左京四条四坊九坪（HJG13次）	
副 書 名	令和２年度発掘調査報告書	
巻　　次		
シリーズ名		
シリーズ番号		
編著者名	村田裕介、木沢直子、佐藤亜聖	
編集機関	公益財団法人 元興寺文化財研究所	
所 在 地	〒630-8312　奈良市中院町 11 番地	Tel 0742-23-1376
発行年月日	西暦　2021 年 9 月 30 日	

ふりがな	ふりがな	コード		北　緯	東　経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号	°′″	°′″			
平城京左京四条四坊九坪（へいじょうきょうさきょうしじょうしぼうくつぼ）	奈良市三条宮前町2-6（ならしさんじょうみやまえちょう）	29101		34° 40′ 54″	135° 48′ 57″	20200817 ～ 20200918	200㎡	共同住宅建設

種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
都城跡	奈良時代	溝 土坑 井戸 掘立柱建物 ほか	土師器 須恵器 土製品 木製品	

要　約	奈良時代中頃から後半にかけての掘立柱建物、柵、土坑などを検出した。 奈良時代中頃の大型土坑には壁溝が廻り、多量の土師器、須恵器が出土しており、工房に関わる遺構と考えらえる。この周囲には掘立柱建物や柵が展開し、短期間で建て替えられたことが分かっており、大規模な宅地の周辺部に設けられた、工房区画と考えられる。

平城京左京四条四坊九坪（HJG13次）
－令和２年度発掘調査報告書－

2021.9.30

（発行・編集）公益財団法人　元興寺文化財研究所
（印刷）株式会社　明新社